匹見町埋蔵文化財調査報告第39集

— 益美地区県営中山間地域総合整備事業に伴う発掘調査報告書 —

アガリ遺跡

2002年3月

島根県匹見町教育委員会

匹見町埋蔵文化財調査報告第39集

— 益美地区県営中山間地域総合整備事業に伴う発掘調査報告書 —

アガリ遺跡

2002年3月

島根県匹見町教育委員会

例　　言

1．本書は，島根県益田農林振興センターの委託を受けて，匹見町教育委員会が平成13年度に行った益美地区県営中山間地域総合整備事業に伴う，アガリ遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は，次のような体制で実施した。

調査主体	匹見町教育委員会	
調　査　員	匹見町教育委員会文化財保護専門員	渡　辺　友千代
	匹見町教育委員会主任主事	山　本　浩　之
調査補助員	匹見町埋蔵文化財調査室	栗　田　美　文
	〃　（臨時職員）	大　賀　幸　恵　　大　谷　真　弓
調査指導員	島根県教育委員会文化財課	
	辰馬考古資料館学芸員	矢　野　健　一
事　務　局	匹見町教育委員会教育長	松　本　隆　敏
	匹見町教育委員会次長	大　谷　良　樹
発掘作業員	栗田　修　　村上　強　　斉藤　幸夫　　大舘　高義	
	森脇　雅夫　　長谷川時子　　益田　愛子	
協　力　者	渡辺　聡　　西川　和代	

3．調査に際しては，島根県益田農林振興センターの堀野技師をはじめ，島根県教育委員会文化財課に終始多大なご協力をいただいた。また，辰馬考古資料館の矢野健一学芸員から一方ならぬご教示を得るとともに，山口大学人文学部の中村友博教授には出土した土器について見解をいただくなど，ご協力を得ることができた。

なお，発掘現場においては土地所有者をはじめ，地元の方々に終始多大なご協力を得て，ここに無事発掘調査を終えることができたことに対してお礼を申し上げたい。

4．今回の調査において，柱穴遺構―P，土坑状遺構―SKと略号している。なお，現場あるいは編集に掲示した現地図面は，美濃郡匹見町土地改良区の協力を得た１／1000の縮尺のものであり，また位置図などは縮尺１／25000を使用したものである。

5．編集にあたっては，前掲の調査員・調査補助員らの協力を得て，執筆・編集は渡辺・栗田がともに行ったものである。

目　　次

第１章　調査に至る経緯と経過 ……（渡辺友千代）…… 1
　第１節　調査に至る経緯…… 1
　第２節　調 査 の 経 過…… 1

第２章　地区の地勢と歴史環境 ……（渡辺友千代）…… 2
　第１節　地 勢 的 環 境…… 2
　第２節　歴 史 的 環 境…… 3

第３章　調　査　概　要 ……（渡辺友千代）…… 4
　第１節　遺跡立地と調査区設定…… 4
　　１．遺跡の所在地と立地…… 4
　　２．調査区の設定…… 4
　第２節　基本的層序と層位状況…… 6
　　１．基本的層序…… 6
　　２．層位堆積状況…… 6
　　３．層序と文化層…… 6
　第３節　遺　　構 ……（栗田　美文）…… 11
　　１．は じ め に …… 11
　　２．遺構のようす …… 12

第４章　出　土　遺　物 ……（渡辺友千代）…… 17
　第１節　は　じ　め　に …… 17
　第２節　実　測　遺　物 …… 17
　　１．縄文土器類 …… 17
　　２．土器からみた位置づけ …… 22
　　３．石　器　類 …… 23

挿図・図表目次

第１図　位　置　図…… 1
第２図　アガリ遺跡と周辺の遺跡分布図…… 2
第３図　地形断面図…… 4
第４図　調査区配置図…… 5
第５図　地 区 名 図…… 6
第６図　土　層　図（1）…… 7
第７図　土　層　図（2）…… 8
第８図　遺構指示図　…… 9～10
第９図　遺構陥入状況図（1）…… 11
第10図　遺構陥入状況図（2）…… 12
第11図　遺構陥入状況図（3）…… 12
第12図　遺　構　図 …… 13～14
第13図　実測土器（1）…… 19
第14図　実測土器（2）…… 21
第15図　実 測 石 器 …… 23

第１表　遺構計測表 …… 11
第２表　遺物集計表 …… 17

図　版　目　次

図版１

１．調査地点鳥瞰　　２．北東側からみた遺跡近景

３．対岸の南側から捉えた遺跡近景　　４．北側からみた十字トレンチの発掘風景

５．西側からみたＡ－ａ調査区の北東壁

図版２

１．Ａ－ａ調査区の西壁（北東から）　　２．Ａ－ａｂ拡張区西壁

３．十字トレンチ北辺の東壁（南西から）　　４．十字トレンチ南辺の東壁（北西から）

５．B区北西区の北西壁（東から）　　６．A調査区の南端側に表出した３B層黒褐色土

７．４層下位部に陥入した暗褐色砂質土（中位部）　　８．Ａ－ａ調査区の遺物出土状況

図版３

１．土器の出土状況　　２．土器の出土状況

３．打製石斧の出土状況　　４．異形石器の出土状況

５．石錘の出土状況　　６．剥片の出土状況

７．A－b調査区の遺構表出状況（西から）　　８．SK01・SK02の表出状況（東から）

図版４

１．SK03の表出状況（西から）　　２．P01・SK04の表出状況（西から）

３．P02の表出状況（北から）　　４．SK05の表出状況（西から）

５．P03・SK07の表出状況（南から）　　６．SK08の表出状況（東から）

７．SK01・SK02の半截状況（北東から）　　８．SK03の半截状況（北から）

図版５

１．SK04の半截状況（東から）　　２．SK05の半截状況（東から）

３．SK07の半截状況（南から）　　４．SK08の半截状況（南から）

５．SK01・SK02の検出状況（北東から）　　６．SK03の検出状況（東から）

７．P01・SK04の検出状況（南西から）　　８．SK05の検出状況（南西から）

図版６

１．SK06の検出状況（東から）　　２．P03・SK07の検出状況（南東から）

３．SK08の検出状況（南東から）　　４．A－b調査区の遺構検出状況（西から）

５．Ａ－ａ調査区の完掘状況（西から）　　６．A－b調査区の完掘状況（西から）

７．Ｂ区北西区の完掘状況（東から）　　８．Ｂ調査区の完掘状況（東から）

図版７

１．実　測　土　器（1）　　２．実　測　土　器（2）

３．実　測　土　器（3）　　４．実　測　土　器（4）

図版８

１．実　測　土　器（5）　　２．実　測　土　器（6）

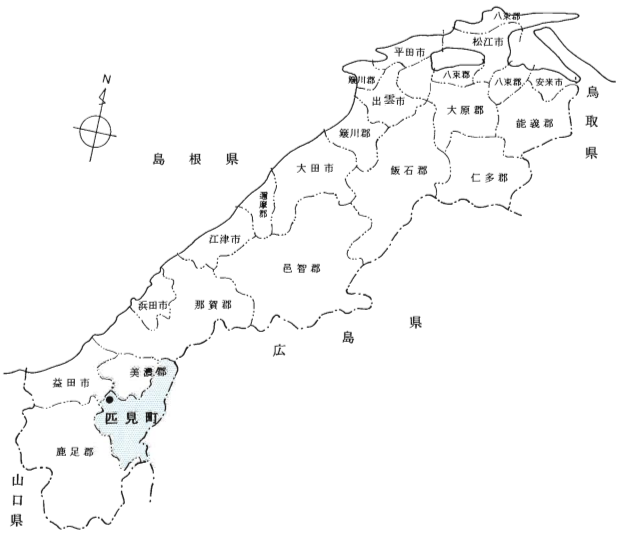
３．実　測　土　器（7）　　４．実　測　石　器

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

アガリ遺跡は，島根県美濃郡匹見町大字澄川イ866番地ほかに所在（第１～４図・図版１－１）するもので，同地区における圃場整備事業に伴い，平成12年度の分布調査で確認されたものであった（註１）。

したがって，調査が必要であるため工事主体者である益田農林振興センターは，埋蔵文化財発掘通知を平成13年４月９日付をもって島根県教育委員会に提出した。そして匹見町との調査委託契約は同年５月21日付をもって取り交わし，現地調査は同年６月27日から始めたのであった。



第１図　位　置　図

第２節　調査の経過

現地調査は，『匹見町内遺跡詳細分布調査報告書XⅢ』でいうアガリ・アガリノ原地点のＤ調査区地点域を中心に行ったものであった。頭初，そのＤ調査区の北側10ｍ地点に十文字のトレンチを入れ，遺物・遺構の文化層を捉えようとしたが、下流の南西側に向かって散布することがわかったので，該当地点域を中心に調査することにしたのである。

調査において縄文土器・石器類，そして数基の遺構が出土したものの，該当時期に影響を及ぼす後世におけるところの掘削が行われていたらしく，けして良好な遺跡であったと言い切れるものではなかった。ただ掘削は比較的容易で，また縄文前期を中心とした土器片も632点数え，けして意義がなかったとはいえないのである。

なお，現地調査を終えた後の同年12月20日には辰馬考古資料館の矢野学芸員の来室を乞い，とくに遺物の面から位置付けを行っていただくとともに，また山口大学人文学部の中村友博教授にも指導を得，現地調査は同年９月７日に無事終えることができたのである。

（渡辺友千代）

［註１］　『匹見町内遺跡詳細分布調査報告書XⅢ』（第33集）　匹見町教育委員会　2001

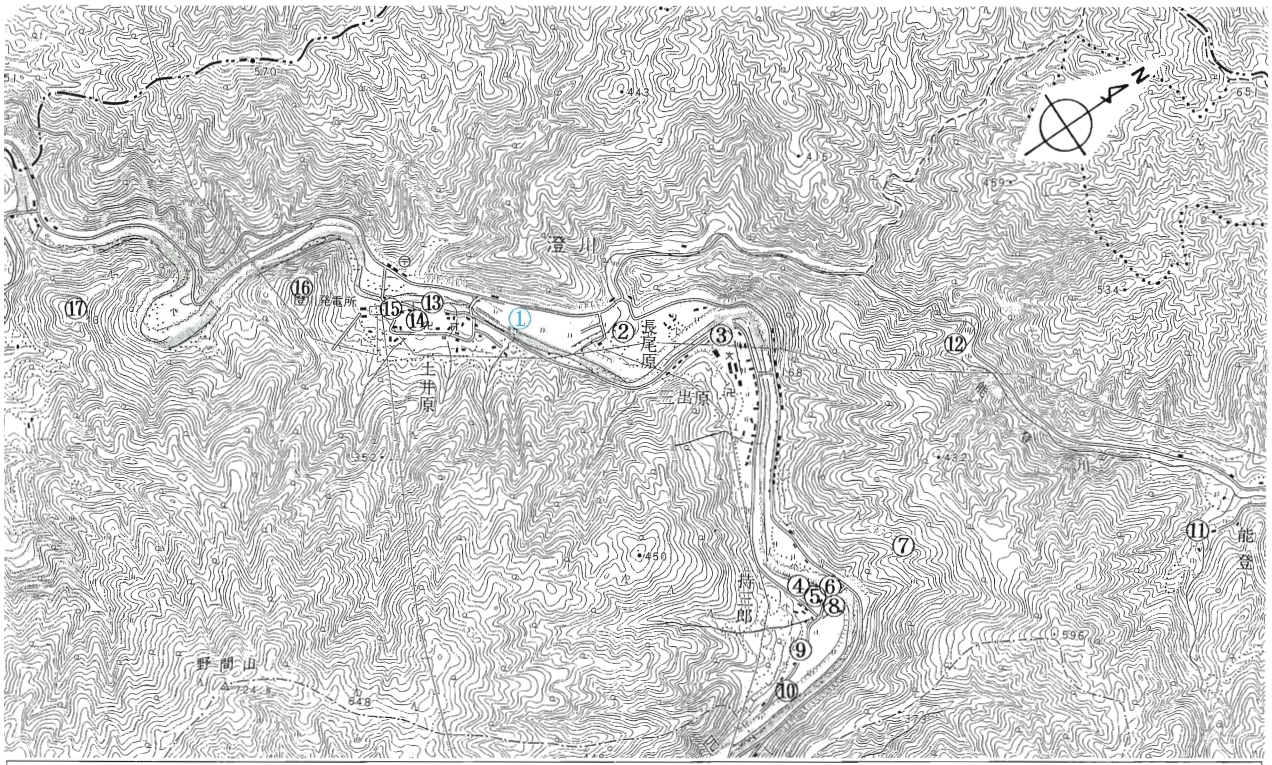
第２章　地区の地勢と歴史環境

第１節　地勢的環境

本地は，当町における７つからなる大字単位のうちの澄川といわれ，近世初頭から明治22年までは澄川村と称された範囲の１地区である。明治22年から昭和30年までは澄川・石谷・広瀬・落合の４村が編成されて匹見下村となり，そして昭和30年には道川村・匹見上村と合併に至るまでは村役場が置かれるなど，匹見下村の中心を果たした地区でもあったのである。

人文的活動域といえば，もっぱら蛇行を繰り返して西流する匹見川が形成した狭長な河岸段丘に限られ，しかもそれは標高140～160ｍを測る持三郎・三出原・土井原・能登といった僅かな地区にみることしかできないのである。そして匹見川にせまる周辺の山地は，標高400～700ｍ台を測って重畳しており，おもな林相はコナラ群によって占められているが，河畔にはツバキ・カシなどの照葉樹，また山頂には多少のイヌブナがみられるなど，全体的には落葉広葉樹の温帯林によって形成されているのである。

現在（平成13年）の世帯数は110軒余りで，事業所は少なく，多くは建設関係の作業員として活計を支え，農業はもっぱら高齢者に委ねられているというのが実態である。本地区には昭和30年まで匹見下村の中心的役割を果たした関係から，現在は小学校・公民館・郵便局・診療所・派出所の公的出



凡　例

① アガリ遺跡	② 嶽城跡	③ 田屋ノ原遺跡	④ 小田原遺跡	⑤ 舟戸遺跡
⑥ 芝遺跡	⑦ 金山溢銅山跡	⑧ 長蓮寺跡	⑨ 山根ノ下遺跡	⑩ 小泓遺跡
⑪ 火ノ口鈩跡	⑫ 丸渕鈩跡	⑬ 寺ノ前遺跡	⑭ 暖遺跡	⑮ 土井原土井跡
⑯ 叶松城跡	⑰ 金山城跡			

第２図　アガリ遺跡と周辺の遺跡分布図

先機関などが存在している。

第２節　歴史的環境

本地区の原始・古代遺跡は少なくはない（第２図）。例えば三出原では，並木Ⅲ・船元・中津式などの縄文のもの，そして弥生では全期に及ぶものが出土した田屋ノ原遺跡があり，また縄文前期の舟戸遺跡，遺物は多少であったものの里木系のものが出土した小田原遺跡がある。そして土井原の寺ノ前遺跡では北白川下層式系の縄文前期のもの，晩期の突帯文などが複合して出土しており，同じく同地区には弥生期の畷（なわて）遺跡もみられるのである。

これらは発掘調査で明らかになったものであるが，他に圃場整備事業後に遺物の採集によって明らかになった遺跡も分布している。とくに芝遺跡では，比較的多量の鐘崎系のものが採集されており，該地区様相を理解する上のでの貴重な資料といえ、また縄文期のものや弥生土器が断片的にみつかった小泓（こぶけ）遺跡も存在しているのである。いずれにしても該地区が狭長な僅かな河岸段丘に立地した土地柄とはいえ,狩猟採集を基調とした特に原始古代においては恰好のエリアであったことを，それらの遺跡が物語っているように思われるのである。

また中世以降の遺跡も分布しているが，山根ノ下遺跡（註１）では掘立柱など家屋と想定される遺構とともに，14～15世紀にかけての遺物が出土している。それらの検出された青磁や和鏡・鉄剣の珍品からは，該地区における支配的有力者の跡であったことが窺われ，注意すべき遺跡ということができる。また，これらに継ぐ戦国期のものには金山城跡といった山城もみられ，とくに寺戸氏が拠ったという叶松城跡を中心とする周辺には，「土井」という館跡，その枝城であったと想定される嶽城跡などの関連する遺跡も分布しているのである。

これらの中世遺跡は，西石見を中心に覇権した益田氏と何らかの接触・影響を受けながら存亡していたものと考えられ，実に叶松城の寺戸氏は弘治（1555～57）年間に益田藤兼から200貫の知行を得て拠城したといわれており，そして金山城の澄川氏も益田氏の思惑から津茂里郷（美都町）の金谷に転退させられているのである（註２）。こうした益田氏の関与は「益田本郷御年貢并田数目録帳」や「益田本郷田数注文」（註３）に，本地区における数地の名田としての耕地名がみられることから，南北朝期には益田氏の勢力が及んでいたことを示しているのである。山根ノ下遺跡にみられる出土した青磁など外来の秀品は，そうした益田氏を介してなされたものと考えられ，恐らくその息のかかった準名主的な階層の住居跡ではなかったかと想定できるのである。

そのほか，近世期のものとしては浄土真宗派の長蓮寺跡が持三郎にあったと伝えられ（今は三出原に存続），また澄川村の庄屋であった藤井氏（屋号を金市屋という）の経営であったという鈩跡が２箇所みられる。そして昭和初期まで採掘が行われていた金山溢銅山跡は，美都鉱山に坑道は連坑しており，昭和60年に閉山したものであった。

（渡辺友千代）

［註１］　『山根ノ下遺跡』（第34集）　匹見町教育委員会　2001
［註２］　矢冨熊一郎著『石見匹見町史』石見郷土史会　1965
［註３］　井上寛司・岡崎三郎編集『史料益田兼見とその時代－益田家文書の語る中世の益田(1)－』1996

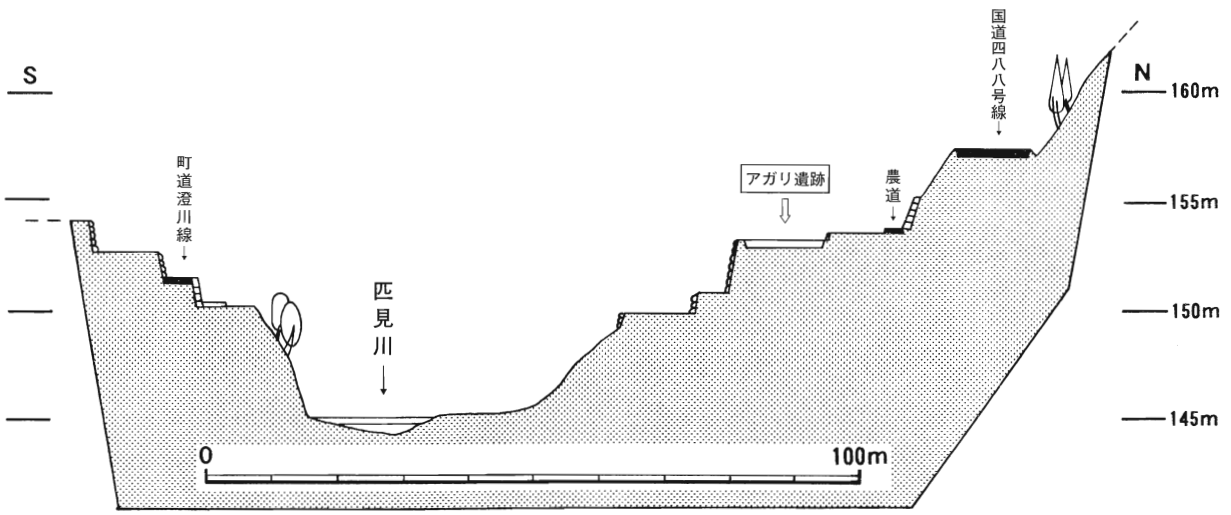
第３章　調　査　概　要

第１節　遺跡立地と調査区設定

１．遺跡の所在地と立地

調査対象地は，島根県美濃郡匹見町大字澄川イ866番地ほかに所在し，集落名を土井原（どいのはら）と呼ばれている地区にある。小字名はアガリノ原またはアガリと呼ばれている場所であるが，遺跡名はそのうちのアガリという地名をもっていうことにした。

本調査地は，南西流する匹見川との比較差約６ｍ測った右岸に立地し，上流側に当たる北東300ｍには匹見川に能登川が相会して小規模な扇状地を形成されており，その扇頂端に当たっている。標高は約153ｍを測り，段丘全体は水田と化され，北西の山畔側には国道488号線が北東―南東方向に貫道しているといった立地にある（第２図～４図・図版１－１～３）。

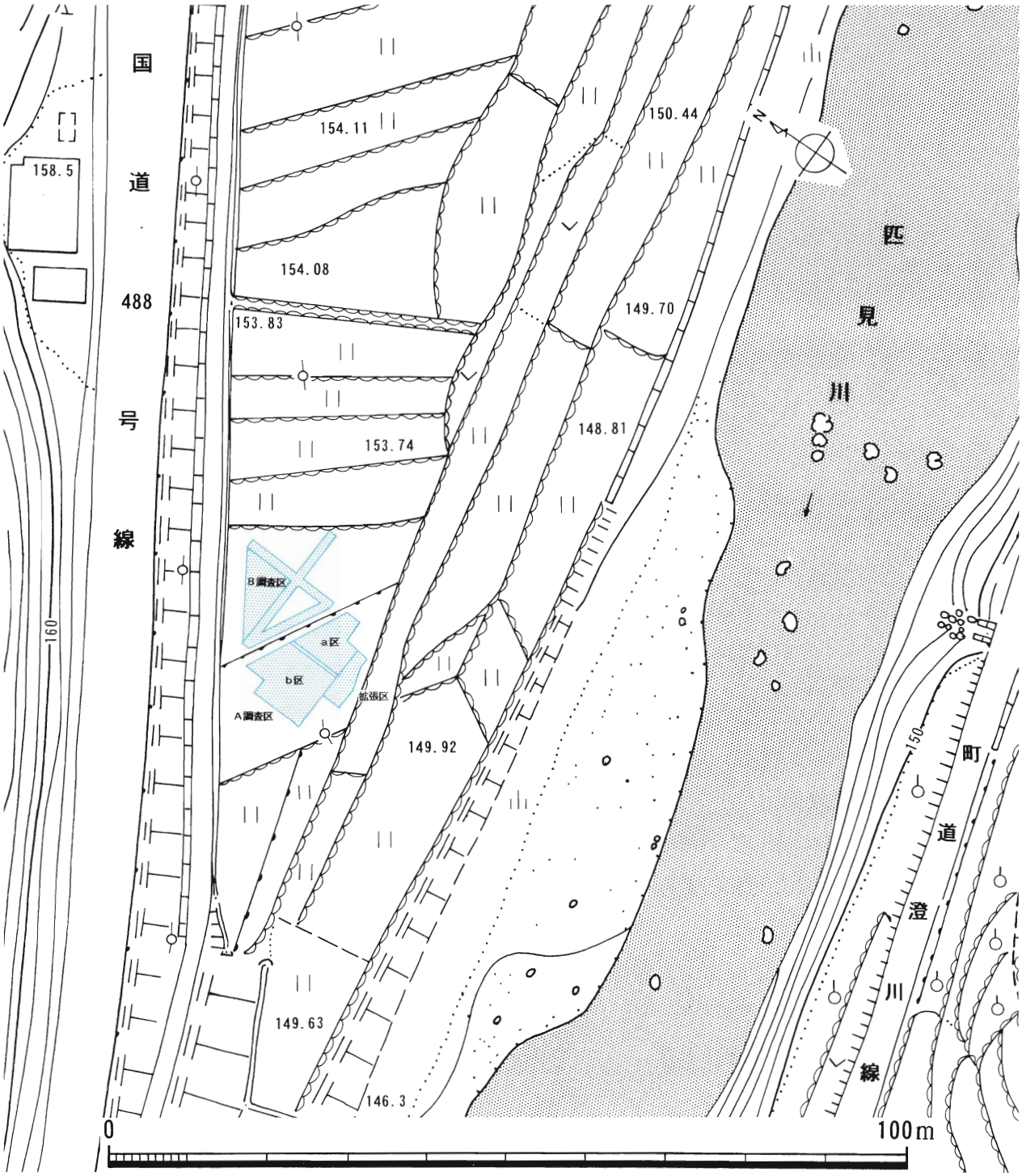


第３図　地形断面図

２．調査区の設定

平成12年度に実施した分布調査（匹見町埋蔵文化財調査報告　第33集）において，遺物が確認された地点は判っていたので，該地点域に任意に調査区を設定することにした。ただし広がりも把握しておく必要があったため，その既掘していた調査区から山畔の北側に向かって約10ｍの地点にトレンチを設定することから始めたのである。そのトレンチは幅１ｍのものとし，北―南方向に向かって13ｍのもの，そして東―西方向のものは磁北方向に設定した北端から７ｍ測って，クロスするように18ｍ測ったものを設定した。つまり十字形のものであり，トレンチ名も「十字トレンチ」と呼称することにしたのである（第５図・図版１－５）。

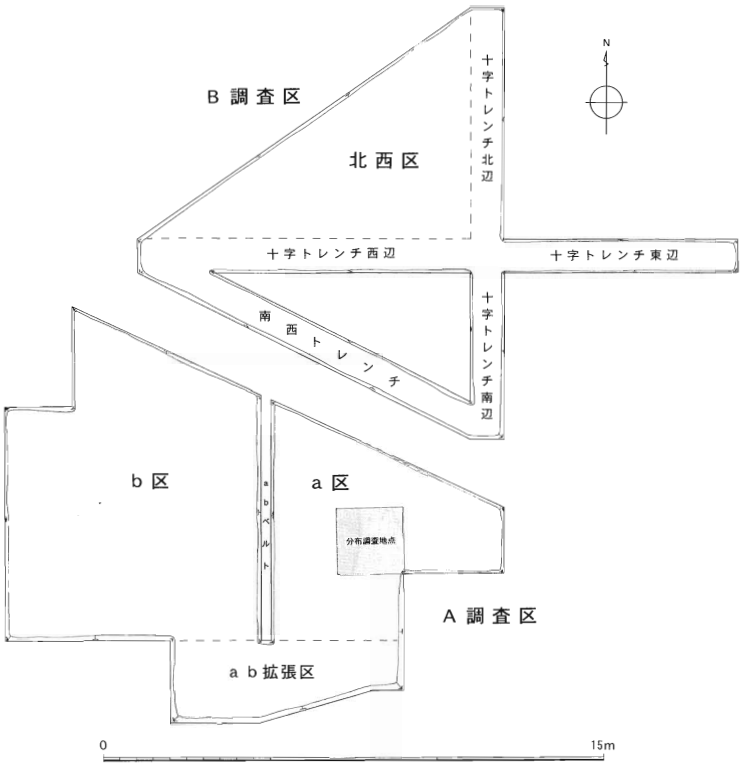
十字トレンチを掘削したが，遺物は数片という極めて少量であった。それも概して南西辺に限られた傾向がみられたので，十字トレンチの北・南・西の端部を結んで三角形の区形に設定し，うち北西区とした35㎡のものを掘削したのであった。やはり土器片６点と顕著さがみられなかったので，つぎ



第４図　調査区配置図

に西。南端を結んだ幅１ｍの南西トレンチを設定し，掘削を試みたのである。その結果，40点余りの縄文土器片が捉えられたので，順序的には前後するが，Ａ調査区と称するものを２ｍ測って南西トレンチに沿って113.85㎡の区画とした。したがって十字トレンチ地点のものをＢ調査区と呼称することにし，最終的には総発掘面積は188.64㎡となったのであった（第８図・図版６－６）。

（渡辺友千代）



第５図　地区名図

第２節　基本的層序と層位状況

１．基本的層序

基本的層序は第６・７図（図版１－５・２－１～７）に掲載しているとおり，１層の暗灰色粘質土，２層の灰褐色砂礫土，３層の黒褐色土（酸化鉄が含侵して暗橙色もみられる），４層の灰橙～黄褐色砂質土，５層の黄灰色砂礫層の順で堆積していた。

ただし，この順序については十字トレンチを中心としたB調査区では明確に捉えることができなかったものであるが，次第に低位に向かってゆくA調査区の堆積状況から把握できたものであった。つまり，山裾寄りのB調査区辺部では３層上位部以上が高い深度で削平されていたことが窺われたのであった。

２．層位堆積状況

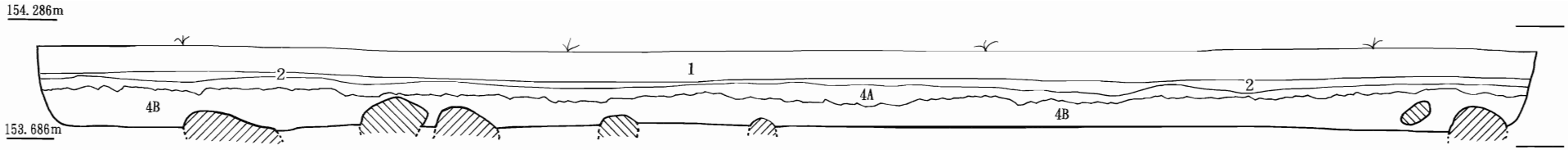
１・２層は，水田耕作のために造成された人工的堆積層といえるものであり，凡そ平均していた。そして３層は黒褐色土の堆積層であるが，上位部に酸化鉄が含侵して橙色おびた部分もみられたため，色調からＡ・Ｂとに分層したが，土壌上からは同質のものと捉えられる。しかし，山裾寄りのＢ調査区では削平されたらしく，確認できなかったのである。おそらく，Ａ調査区の拡張区では厚深部分において，30㎝ばかり堆積（図版２－６）していた部分もみられたことから元来，該当層はそうした層厚で自然堆積してたものと想像する。

４層は砂質土層で，上位部は酸化鉄が含侵して灰橙色おびた部分もみられたが，凡そ暗～黄褐色した堆積層であった。ほとんど礫はみられず，粘質おび，層厚は20～35㎝測って比較的安定した堆積状況であった。なお遺物は，Ａ調査区を中心に縄文土器片と多少の石器類を伴い出土し，下位部には遺構も検出したのである（第12図・出土遺物集計表・図版３）。

５層は，河床と思われる砂礫層で，遺物および遺構と捉えられるものは確認することはできなかった。したがって以下の層位は掘削調査を行うことはしなかった。

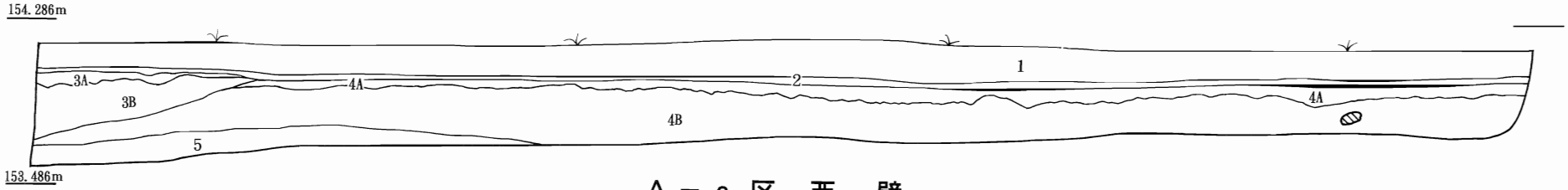
３．層序と文化層

文化層といえるものは，３～４層にかけて複層するものであったと想定されるが，前述したとおり，３層（部分的に４層も含まれるが）のほとんどが削平された様子が窺えることから，明確ではない。ただし，遺物は４層内で比較的出土したこと，そしてこれらに伴うと想定される土坑などの遺構には４層上位から中位部の暗褐色土の陥入がみられたことから，その前後の部位層に構築されていたもの

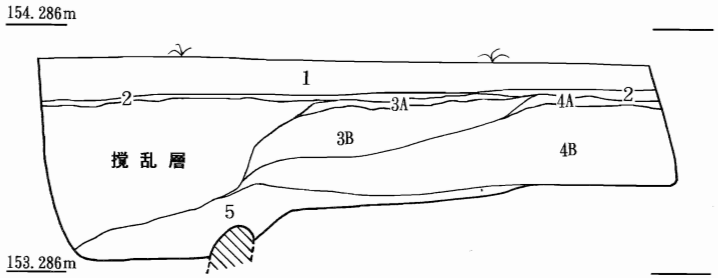


A－a区 北東壁

A－b区 北東壁



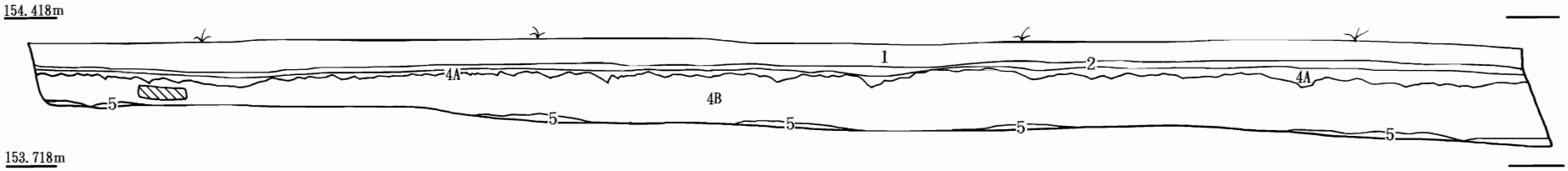
A－a区 西 壁



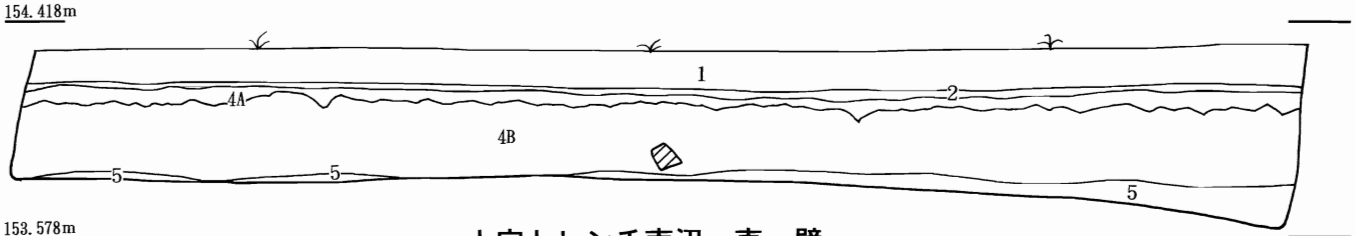
A－ab拡張区 西 壁

1層　暗灰色粘質土（耕作土）
2層　灰褐色砂礫土（客土）
3A層　暗橙色土（酸化鉄層）
3B層　黒褐色土
4A層　灰橙色砂質土（酸化鉄層）
4B層　暗～黄褐色砂質土（やや粘質性）
5層　黄灰色砂礫層　（河床礫）

0　5m

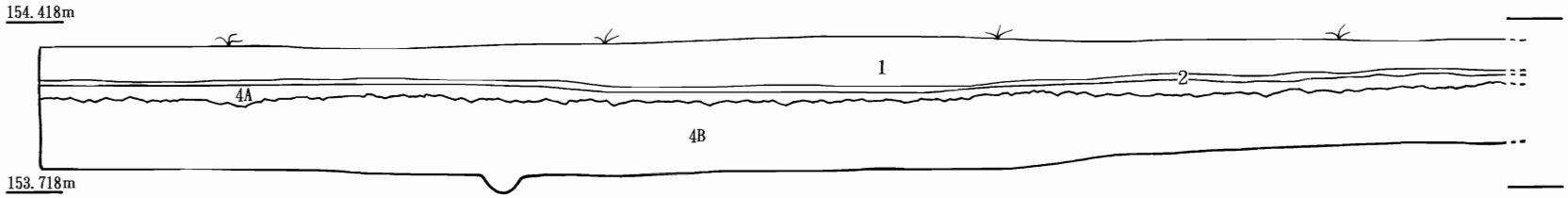


十字トレンチ北辺　東　壁

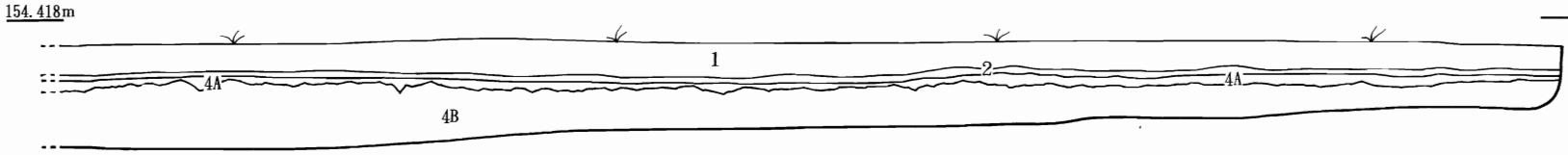


十字トレンチ南辺　東　壁

1層　暗灰色粘質土（耕作土）
2層　灰褐色砂礫土（客土）
3A層　暗橙色土（酸化鉄層）
3B層　黒褐色土
4A層　灰橙色砂質土（酸化鉄層）
4B層　暗～黄褐色砂質土（やや粘質性）
5層　黄灰色砂礫層（河床礫）

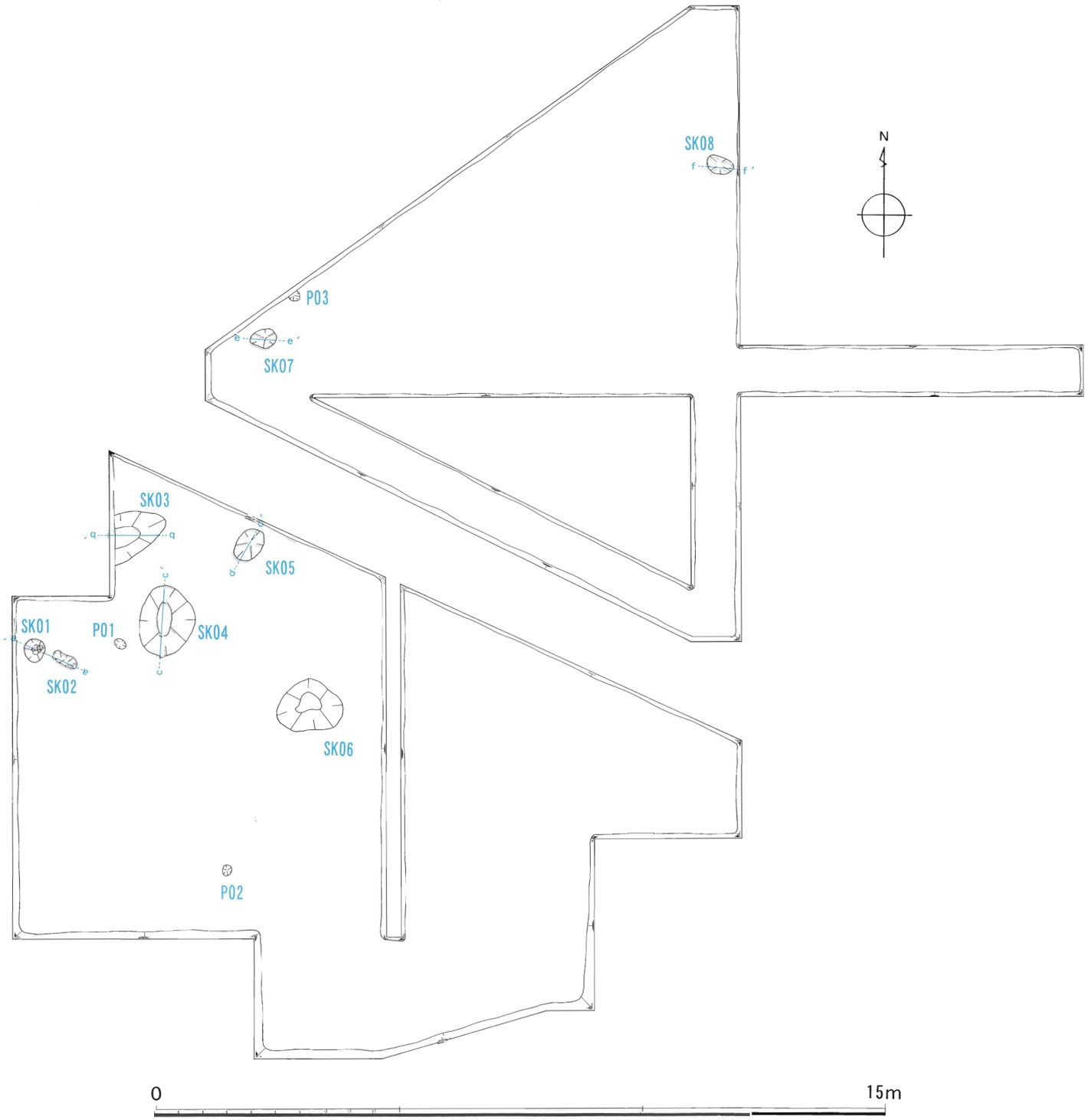


B－北西区北西壁（左辺）



B－北西区北西壁（右辺）

第7図　土層図(2)


N
SK08
f
f′
P03
e
e′
SK07
SK03
q
q′
SK05
c
c′
SK01
P01
SK04
SK02
SK06
P02
0
15m

第 8 図　遺構指示図

と想定される。ただ遺物からは縄文時代前期から中期という年代幅があるため，遺構の共伴遺物に明確な時期差が捉えられなかったものの，層位的にみるならば該当遺構は縄文前期に位置付けられるものだったかも知れないと考える。したがって３層は縄文中期に該当するものであった可能性がある（SK08）が，いずれにしても大半が４層上位までおよぶ深い削平が遺跡の位置付けに混乱をもたらしていることは確かといえ，想像の域を出ないのが現状であったのである。

また，一部の出土遺物には陶磁器などの中世期に位置付けられるものも出土していることから，該当文化期があったといってよいが，再述しているとおり上位層の深度の強い削平からは具体的生活誌を捉えることができないのである。

（渡辺友千代）

第３節　遺　構

１．はじめに

遺構は，A・B調査区と地区名割した遺跡範疇からSKとした土坑が８基，柱穴状のPと略号したも

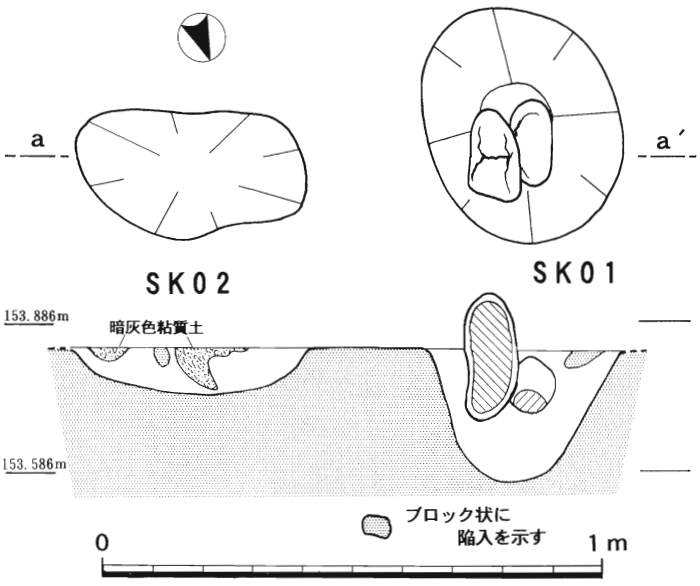
遺構名	地区名	短径(cm)	長径(cm)	深さ(cm)	表出面標高(m)	層　位	摘　要
P01	A調査区	19.0	24.0	15.0	153.786	4層中位～下位	
P02	A調査区	16.0	19.0	7.0	153.846	4層中位～下位	
P03	B調査区	20.0	－	9.0	153.808	4層中位～下位	
SK01	A調査区	38.0	46.0	26.0	153.846	4層中位～下位	炭化物少量
SK02	A調査区	24.0	46.0	10.0	153.836	4層中位～下位	炭化物少量
SK03	A調査区	91.0	－	17.0	153.836	4層中位～下位	炭化物少量
SK04	A調査区	104.0	144.0	27.0	153.816	4層中位～下位	炭化物中量・縄文土器１点
SK05	A調査区	52.0	68.0	13.0	153.846	4層中位～下位	炭化物少量
SK06	A調査区	88.0	132.0	18.0	153.796	4層中位～下位	
SK07	B調査区	36.0	50.0	13.0	153.818	4層中位～下位	
SK08	B調査区	26.0	50.0	13.0	153.938	3層下位	

第１表　遺構計測表

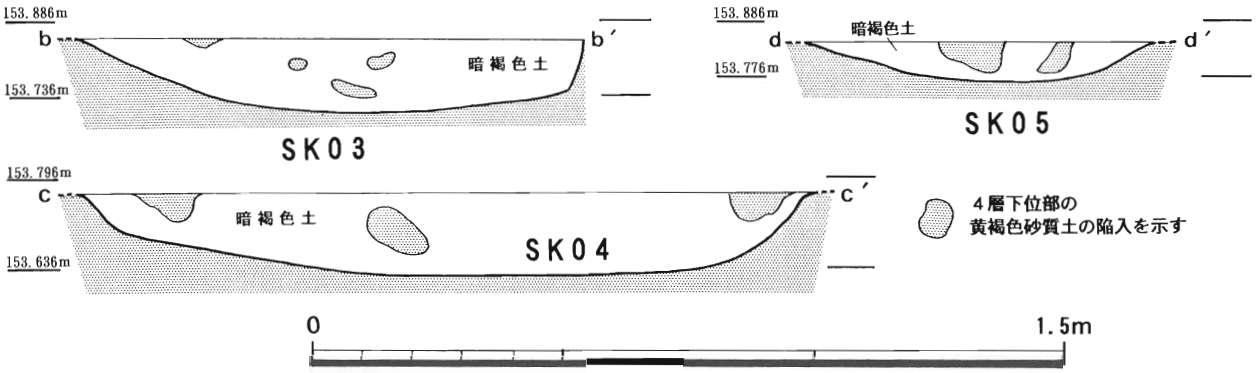
の３基が検出された（第12図・第１表・図版４・５）。

これらは凡そ径40㎝以上のものをSKとし，30㎝前後以下のものをPと略号することにした。大半は４層中位部から下位部に表出したものであり，４層上位から中位部に堆積していた暗褐色土が陥入していたのである（第９・10図・図版３－７～図版４）。ただし北東端に検出したSK08では，３層下部の黒褐色土が陥入し，１基のみ異なっていたのである（第11図・図版６－３）。

なお，遺構が表出した４層中位部下は



第９図　遺構陥入状況図(1)



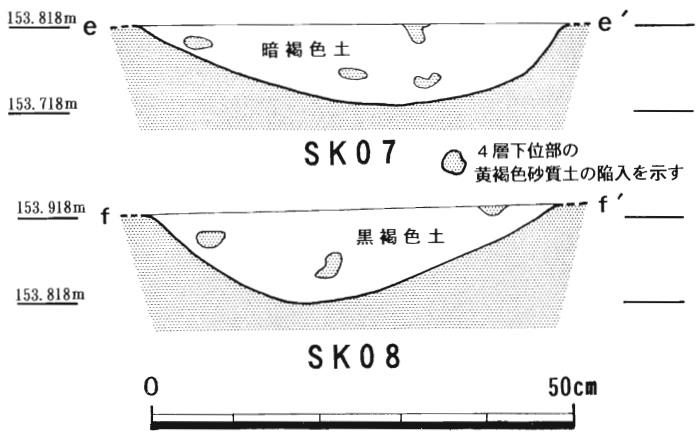
第10図　遺構陥入状況図(2)

砂質性という土質であったため，坑壁は貧弱で表出面も明確ではなく，やや掘削しすぎた部分もあったが，以下その検出状況をみていくことにする。

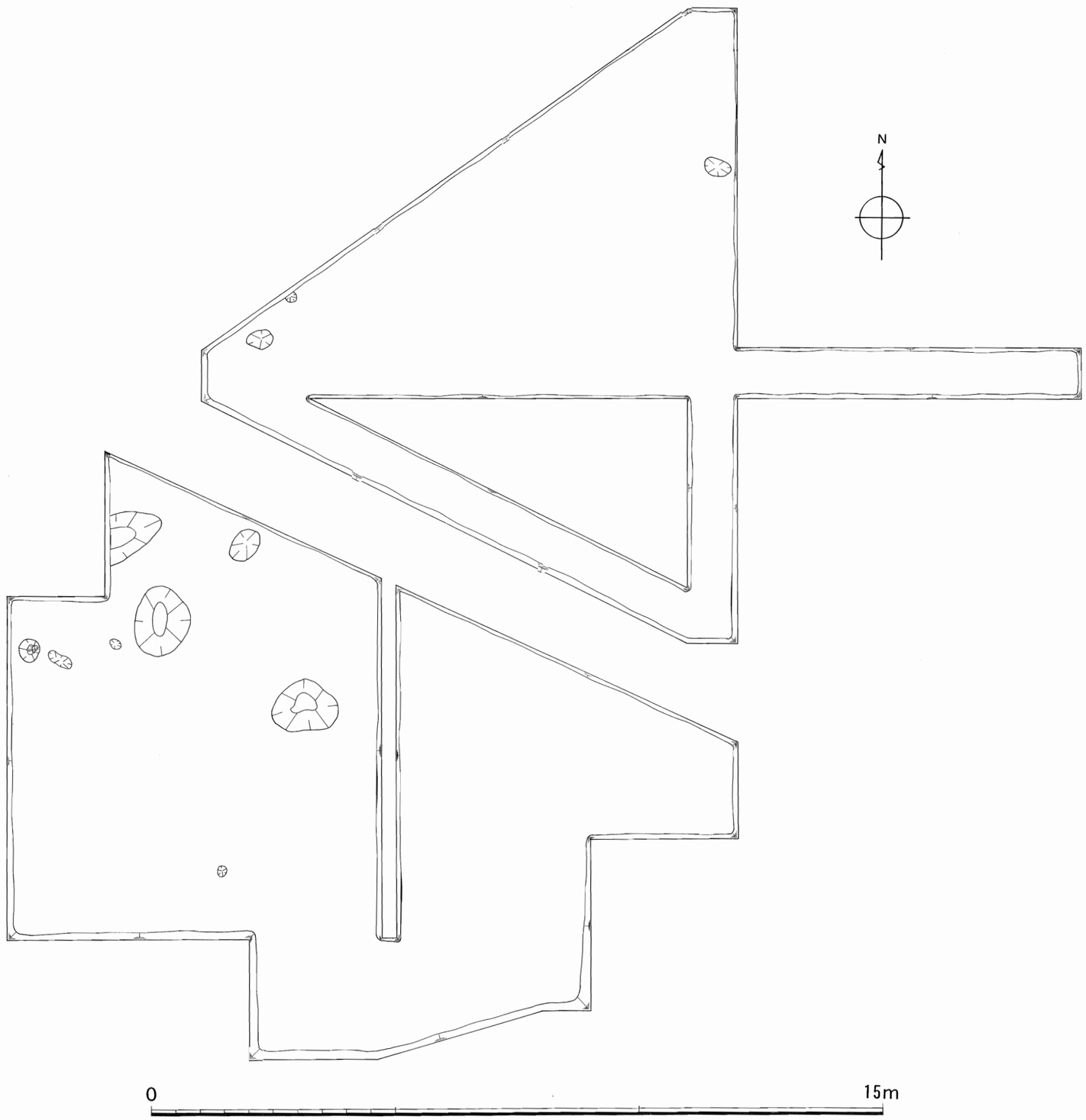
2. 遺構のようす

調査対象地の南西側に設定したA調査区では，SKとした土坑状のもの6基，そして柱穴状のもの2穴が検出された（第8図・第1表）。これらの遺構の全ては，A調査区の西半部（b区）に確認されたもので，4層暗～黄褐色砂質土の中位と下位との層界に検出されている。それらの構内のほとんどに，4層中位部の暗褐色砂質土が陥入していることから，構築部とみられる層位は4層中位部以上に存在していたと考えられる。しかし，頻度の高い削平などがあって，明らかにできないものもあったと想定される。なおSK01～05までの土坑には炭化物が認められ，またそのうちのSK04には，1点の縄文遺物を確認することができたのであった（第1表・図版8—2）。

b区の西面端では，SK01・02が検出された。このうちSK01は，ほぼ円形状を呈する土坑で，径凡そ42㎝前後，深さ約26㎝を測って坑高があり，その坑壁は他の土坑より斜度をもっていた。そして坑内には2個の10～25㎝を測る河原石を伴い，4層中位部の暗褐色砂質土が陥入する。介在する河原石は，土坑範囲内のほぼ中央部に重なるように配石し，うちの1石は立石状を呈していた。これらの河原石は，検出状況などからみて，意識的につくられたものと想定できるものの，その目的あるいは性格については判らなかった（第8・9図・図版3—8・4－7・5－5）。そしてその東側に隣接するSK02は，最大長径が約46㎝，短径約24㎝で，深さ10㎝を測って，楕円形を呈した土坑であった（第8・9図・図版3—8・4－7・5－5）。坑内の大半には，4層の暗褐色系のものが陥入しているものの，部分的に1層の暗灰色粘質土がみられることから，それはモグラ類などによる生物痕と判断した。これらの両坑には，少量の炭化物が認められただけで，他に共伴する遺物などはみられなく，それらの機能的位置付



第11図　遺構陥入状況図(3)



第12図　遺　構　図

けはできなかった。

つぎのSK03は，北西面の西壁際に半出して検出されたものである（第８・10図・図版４－１・－８・５－６）。短径は約91㎝を測るが，長径については一部が壁外に介入されていて判らないが，形状からみて，1.3ｍはあると推測される。その深さ約17㎝を測り坑壁は緩やかで，坑内には４層の暗褐色砂質土が陥入し，少量の炭化物も確認されたのであった。そして南東寄りに検出されたSK04は，本調査区で最も大きな楕円形を呈した土坑である（第８・10図・図版４－２・５－１・－７）。長径は約144㎝，短径約104㎝で，深さ約27㎝を測って比較的深い。その坑内を覆う埋土は暗褐色系のもので，ブロック状に下位部の黄褐色砂質土が嵌入していた。また陥入土には，中量ほどの炭化物が確認され，１点の縄文土器片が混入していた。これらの状況から，炉址などの可能性も考えられるが，焼土などはみられないことから，断定はできないものの，人為による火が扱われた場所であったということがいえる。なお，遺物と包含・共伴性からみて，縄文前期と想定した時期に伴うのものであったと考えられる。

同区内の北～東面にかけては，円形状のSK05・不整形を呈したSK06の土坑が検出された（第８・10図・図版４－４・５－２・－８・６－１）。これら両坑も４層上位部の暗褐色砂質土から下位部の黄褐色砂質土に至る陥入状況から，縄文期の遺構であろうと考えられるが，しかし性格については判然としないものであった。

土坑が集中する北西面のP01は，４層暗～黄褐色砂質土の上位部と下位部の層界面に検出され第８図・図版３－７・４－２・５－７）。短径約19㎝，長径約24㎝で，深さ24㎝を測り，比較的深かった。その坑内には，縄文期の文化層として捉えた４層中位部の暗褐色砂質土，そして部分的に黄褐色系の砂質土が嵌入していることから，構築面は４層中位以上に存在していたと理解している。また，その南東面に確認されたP02（図版４－３）も，P01と同じような検出状況であったことから，この両穴は同時期の一連性をもったものと想定されるものであった。

A調査区の北東側に設定したB調査区では，土坑状のもの２基，柱穴状１基が検出された（第８図・第１表）。そのうちSK07は，北西区の南東端面に検出されたもので，A調査区で確認されたSK01・05と同形態のものである（第８・11図・４－５・５－３・６－２）。長径約50㎝，短径約36㎝で，深さ約13㎝を測って，坑壁は弛緩であった。その坑内には，やはり４層上位部の暗褐色土が陥入していた。また，そこの北東側の北西壁に半出し在穴するP03（第８図・２－７・４－５・６－２）にも，４層上位部からの陥入が壁にはっきりと認められることから，これらも前途した遺構と同時期の関連性のあるものとして捉えられるものであった。

それらの北東側の十字トレンチ北辺面で確認されたSK08，他の遺構とは違う様相を呈していた（第８・11図・図版４－６・５－４・６－３・－７）。坑内には４層上位部の暗褐色系の土質のものが陥入しているのが本遺跡の基準であるが，しかし本坑の埋土を土質・色調的にみても，A調査区の南端側に僅かに残存する３層下位部の黒褐色土の陥入なのである（図版２－６）。しかし，そこは共伴する遺物などは認められないが，遺物の包含・陥入状況からみて，おそらく縄文中期と想定した時期に伴うものであろうと判断した。しかし，その痕跡が１坑ということもあって，具体的用途については判らなかった。

これらの遺物の殆どは，縄文早期末～中期に伴うものであって，それらはA調査区の北西側にと偏在するという傾向がみられた。そうした生活痕跡は，原地形などから想像すると，つまり北西側に広がっていたと考えられる。しかし本調査域は下流側の段丘端部で尖滅地ということもあって，そこには山裾が迫り狭小なうえ，さらに高位部であることから，頻度の高い削平の影響もあると思われたのである。したがって，その周辺を拡張して調査しても，良好な資料は得られないと判断し，掘削はしなかったのである。

（栗田　美文）

第4章　出　土　遺　物

第1節　はじめに

遺物の採り上げについては，水田耕作土等による後世におけるところの人為層といえる1・2層以外（3層～4層）に出土した遺物は一様，層位ごとに原位置方法を用いて行った。ただし撹乱層や前述の1・2層については該当文語を記したのみで採り上げたものである。

これらの出土した遺物は，文化期ごとに大別して3期に分類することができるものであった。つまり縄文期のもの，瓦器・須恵質を中心とした古代・中世期のもの，そして陶磁器（3点は中世期のものを含む）などの極めて少量であるが，近世以降のものということができる。

また層位による垂直的分布は，凡そ3層が縄文期のものと中世期のものが混在し，そして4層は縄文遺物のみのものであって，遺構も検出されたのである（第2表　遺物集計表）。ただ表土から3層までに及ぶ深度の高い削平が行われていた状況が窺われたことから，とくに中世期以降の遺物については根拠的にも乏しく，顕著なものがなかったので，今回はそれ以降のものは除くことにした。

したがって，図掲したものは縄文遺物のみということになるが，その縄文遺物は炭化物を除いて631点であった（第2表　遺物集計表）。それは土器片が623点，石器類は8点で，前者が98.7%，そして後者は1.3%という大差のある出土率であった。これらのうち，その特徴が顕著であるものを抽出し，おもに調整・施文方法などを中心に捉えてコメントをしていきたいと思う。

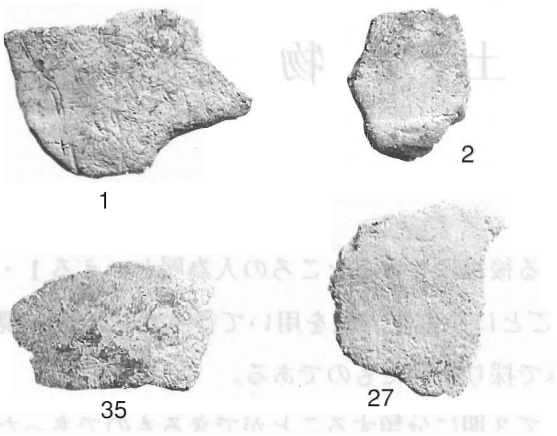
		縄文土器	土師質器	瓦器質器	須恵質器	陶磁器類	土　錘	打製石斧	石　錘	異形石器	剥　片	金属器類	キセル	ガラス	炭化物	計
A－a区	1～2層		1			11							1		少量	13
	4　層	62							1						少量	63
A－b区	1～2層	1	2		1	26	1	1								32
	3　層				2	1	1					2				6
	4　層	453							2	1	1					457
A－ab拡張区	撹乱層							1								1
	1～2層		1		1	3										5
	3層下面	18	1													19
	4　層	45														45
	撹乱層	1	5	1		4	1	1								13
B区北西区	1～2層		1		1	10										12
	4　層	6														6
十字トレンチ北辺部	4　層	1													少量	1
十字トレンチ東辺部	1～2層					1										1
十字トレンチ西辺部	4　層					4								1		5
	4　層	3														3
南西トレンチ	4　層	41														41
共伴遺物		1													少量	1
計		632	11	1	5	60	3	3	3	1	1	2	1	1	―	724

第2表　遺物集計表

第2節　実測遺物

1．縄文土器類（第13・14図，第2表，図版7―1～4・8－1～3）

1～13は，無文ないし条痕文土器の口縁部片。このうち，1・2は，器面に顕著な繊維痕が観察され（写真），そして口縁端部に浅い刻みがみられるもの。うち1は，A－b区南西側4層から出土したもので，波頂部でわずかに内湾ぎみにたちあがり，口縁端部はやや平滑に仕上げられている。2もおなじくA－b区南西側4層から出土した繊維混入土器で，頚部は内折を成し，丸みをおびながら口



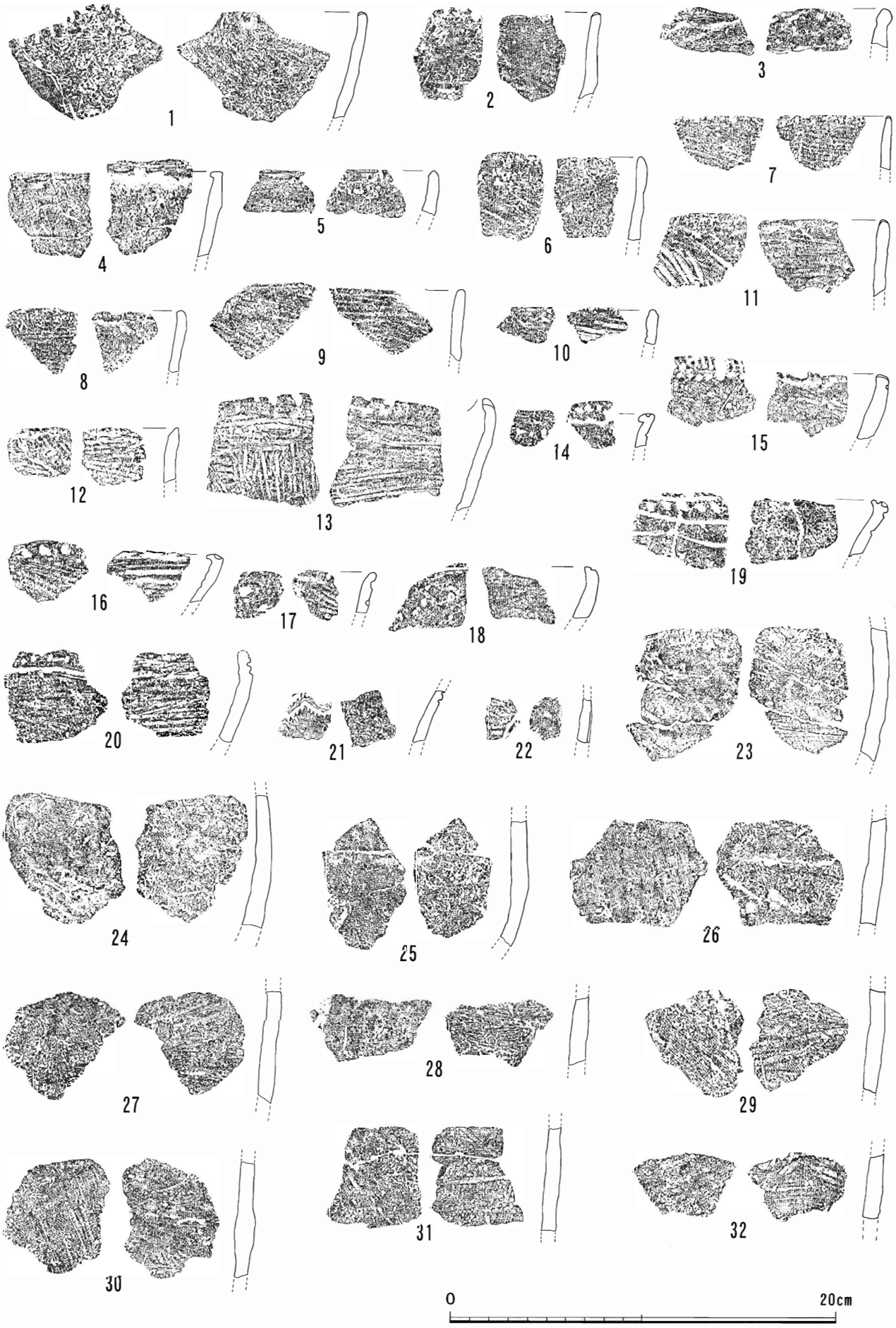
顕著な繊維混入土器

縁は渋に向かって，やや外半気味にたちあがる。いずれも両面はナデ調整で，６㎜前後の器篤を測り，薄手といえるもの。色調は凡そ灰茶褐色を呈し，焼成は良いとはいえない。このようなアガリ遺跡出土の繊維土器は，新槙原遺跡出土の繊維土器と胎土上の類似点をみることから，その脈絡にある早期後葉から前期初頭ごろのものと位置づけておきたいと思う。恣意的ではあるが，アガリ遺跡の繊維土器に観察される繊維痕は一本一本が短く，バラケており，繊維とはいいながらも，あるいは獣毛の可能性があるのではないかと考えている。また，資料が僅少で断定はできないが，１・２から判断すれば，当該期の器形は若干のバラエティーをもつものとして捉えることが可能かも知れない。

３～５は，口縁端部の形態が特徴的なもの。うち３・４は，口縁端部を折り返して成形されるもので，３は外面へ，４は内面へ折り返してナデとしている。これらは両面ナデ調整であるが，器面が凹凸していて，器厚は一様でない。５は口縁端部内面が取削され，鋭角的な形態を成すもの。両面ナデ調整で凹凸はみとめられない。３・５は，暗褐色を呈し，胎土中に繊維を含む可能性がある。４は，茶褐色を呈し，炭化物が付着する。

６～９は，器面にナデ調整が施されるものの，素地に条痕が看取できるもの。器厚は凡そ５㎜を測って，薄手である。このうち，６の条痕調整具は詳かでないが，７～９の条痕は二枚貝によるものとおもわれる。６は，やや内湾ぎみにたちあがり，口縁端部は丸みをおびる繊維混入土器。器面のナデは丁寧とはいえず，凹凸がみられる。色調は橙褐色を呈し，色調・器厚からみて，繊維混入土器としてはやや異質である。７・８は，口縁端部を丸くおさめ，７は，ごくわずかに外反ぎみに，そして８は，やや内湾ぎみにたちあがるもの。９は外傾して，口縁端部を平滑に仕上げている。これらの色調は凡そ橙褐色～薄茶褐色を呈するものである。明確にはいえないが，その調整方法や色調などからみて，７～９は後述する14・16といった羽島下層古段階に併行するものかも知れない。

10～13は，二枚貝による条痕調整土器で，このうち10～12は，胎土に繊維を含む可能性がある。10は内面にのみ，斜方向の条痕調整が看取され，外面はナデ調整。器厚は５㎜と薄手で色調は橙褐色を呈する。口縁端部も含めて器面の整形は粗く，凹凸が認められる点では３と通底するように思われる。11～13は，表裏条痕文土器で，11・12は外面に斜方向の，13は縦横方向の条痕調整が施される。11は，内面にナデ調整が施されるが丁寧でなく，凹凸し，口縁端部は丸みを帯びる。12の外面条痕は明らかではないが，内面の条痕は二枚貝によるもので，口縁端部は尖り気味に成形され，外傾する。器厚は６㎜を測り，薄手である。ただし13は，表裏条痕文土器ではあるが，胎土中に繊維を観察できず，また口縁が波状をなして，その端部を刻むこと，内湾する器形を呈することなどから，他の条痕文土器と同一期のものとして判断するには躊躇する。それは中期春日式の粗製土器と類似性を見い出せないでもないと考える。10は橙褐色，11～13は暗茶褐色を呈し，うち，13の外面には炭化物が付着する。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
0
20cm

第13図　実測土器（1）

14～22は，有文土器である。このうち，14～16は，端部内面が折り返し状に成形された口縁部片で，口縁端部には刺突文がほどこされたもの。これらは口縁にむかってやや内湾ぎみに外傾する。14・15は，外面にも刺突文が施され，14は平滑な口縁端部，外面ともに三日月型の刺突による同一施文が施され，色調は薄茶褐色を呈する。焼成は良好ではない。15は，平滑な端部を縦長に刻み，外面には口縁に沿ってこまかな刺突文が１条ほどこされる。両面はナデ調整で，色調は暗赤褐色を呈し，焼成は堅緻。16は，表裏ともに横位の二枚貝条痕が顕著で，折り返し状に成形する。口縁端部は８㎜を測り，器厚にくらべ厚手である。そして口縁端部の刺突文は顕著で，色調は暗褐色を呈する。17は口縁端部が丸みをおび，折り返し状に成形しないものの，14・15と同様に刺突文が施される。ただし，その刺突文は不規則である。このうち15については断定を避けるが，14・16・17は，施文・調整方法などからみて，凡そ羽島下層古段階に比定できるものと考えている。

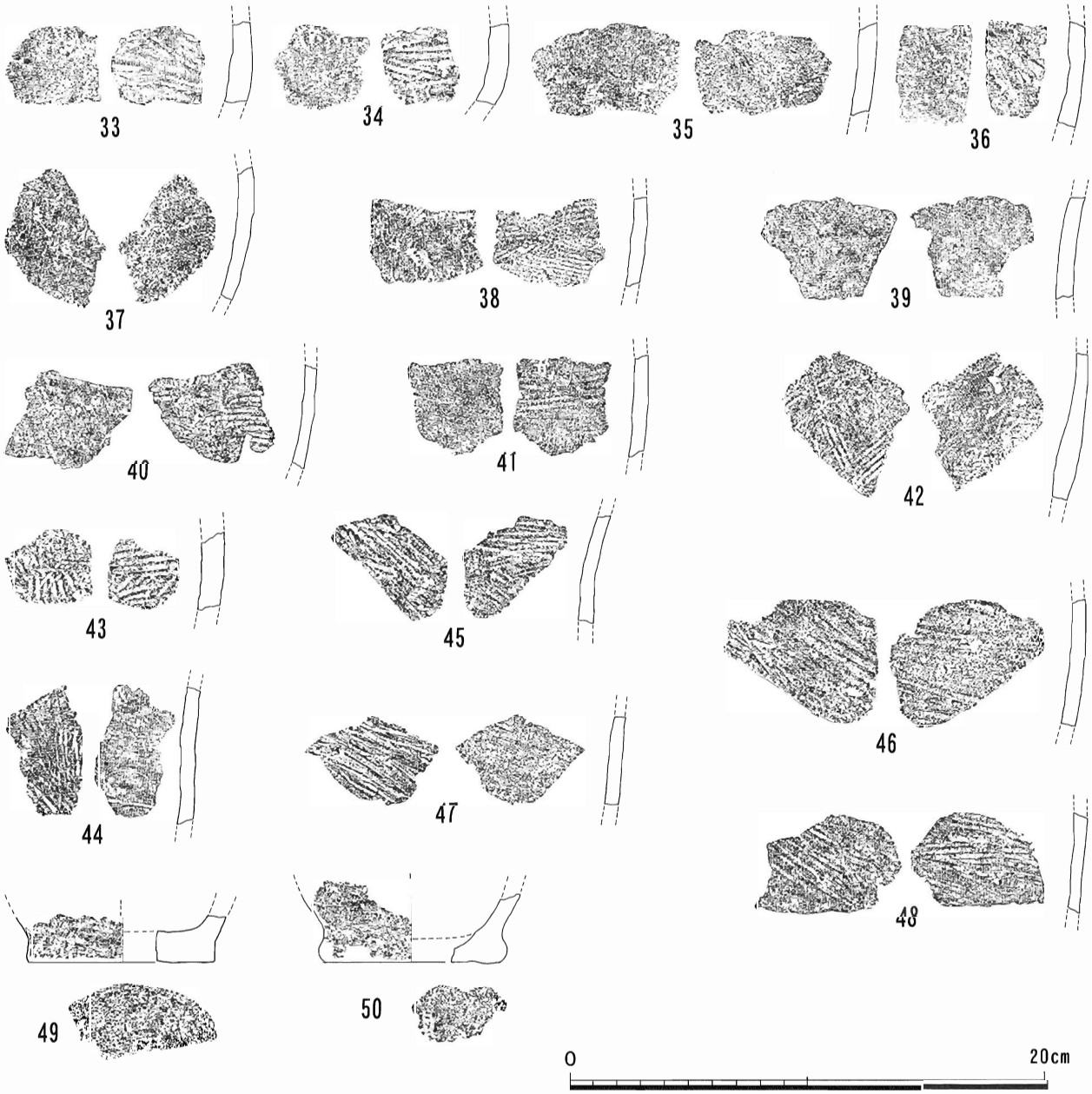
18～21は，外面に刺突文と沈線文が施されるもの。18・19は，口縁端部にむかって内湾ぎみにたちあがる口縁部片で，調査区南西側４層より出土したもの。そして18は，口縁端部の曲沈線の下位に竹管による刺突文が施され，両面はナデ調整，器厚は６㎜を測る。19・20は，ともに水平な沈線間に刺突文を施し，色調は薄茶褐色を呈する。ただし，19の最下位の沈線は連弧状にほどこされ，両面ナデ調整で器厚は５㎜と薄手である。20は，内面を二枚貝により条痕調整し，器厚は７㎜を測る。18～20の資料については，内湾する器形・施文方法などからみて，中期後半期に位置づけられるとおもわれる。21は外反する部片で，外面には細い鋸歯状の沈線をひいたなかに刺突をし，そして沈線内には刺突文が施されている。ただし，その刺突文ははみ出しぎみである。両面はナデ調整で，器厚は凡そ3.5～５㎜を測って，薄手である。施文方法は，春日式轟木ヶ迫～南宮島段階の資料と類似するものであろう。22は縦位の曲沈線が施され，両面ナデ調整であるが，外面には条痕地を残し，内面は凹凸する。器厚は６㎜を測って，薄手といえ，色調は暗褐色を呈する。

23～41は，両面ナデ調整ないし外面ナデ調整の胴部片。このうち23～36は，凡そ８㎜～１㎝の器厚を測り，厚手といえるもの。いずれも胎土中に繊維を混入している可能性がある。とくに27・35は，顕著に観察される（写真）。23～25は，A－a区南西側４層出土。底部にかけて内湾する胴部片で，胎土には石英，白色粒を含み，色調は茶褐色。胎土，色調ともに近似し，また同一地点より出土していることから，これらは同一個体の可能性がある。26は，両面ナデ調整で，内面には接合痕が看取される。内面は橙褐色，外面は灰茶褐色を呈する。胎土中には繊維のほか石英を含む。27・30は，くびれる胴部片でいずれも焼成は堅緻，外面には炭化物を付着する。うち，27は内外面を斜方向にナデ調整し，色調は暗褐色を呈する。30は外面を縦方向にナデ調整し，内面は指頭によるナデで凹凸がみられる。色調は外面を茶褐色，内面は暗褐色を呈する。28は，内面の条痕地をナデ消し，その色調は薄茶褐色，外面は暗褐色を呈する。29は，外面斜方向のナデ調整，暗褐色を呈する。

31～34は，内面に条痕調整がみられるもので，内面の色調はいずれも暗褐色を呈する。このうち，31・32は内面の条痕をナデ消すもの。31の内面に看取される条痕は植物質によるものか。32～34は，二枚貝によるものと思われる。A－b区南西側４層より出土。33・34は，底部にかけて内湾する胴部片で，器厚は凡そ１㎝を測り，厚手といえ，外面には炭化物が付着する。35・36は，内外面ナデ調整で後者は内面に凹凸がみとめられる。色調は灰褐色～暗褐色を呈し，外面には炭化物が付着する。

37～41は，器厚が凡そ５㎜前後を測り，上述の23～36に比べ，薄手といえるもの。このうち37は，内外面ナデ調整で，色調は黄褐色を呈し，焼成は粗野である。胎土には繊維が混入する。38・40・41は，器面に二枚貝による調整痕がみられるもので，暗褐色を呈する。38は，両面ナデ調整で施されるが，内面にはわずかに条痕が看取され，器厚は６㎜を測る。39はSK04の出土資料。外反し，内外面ナデ調整で色調は暗褐色を呈する。胎土に繊維を含む可能性がある。40は外面を斜方向のナデ，内面は二枚貝による条痕調整である。41は外面ナデ調整，内面は二枚貝のちナデ調整で，胎土に繊維を含む可能性がある。なお，37・38・40は，外面に炭化物が付着する。

42～48は，両面ないし外面に条痕調整が認められる胴部片。42は，外面に二枚貝条痕による装飾的な山形文状の文様を描き，他の単純な条痕文土器とは異質といえる。内面は凹凸するナデ調整。外面には炭化物が付着し，胎土には繊維を混入する可能性がある。43・44は，外面に縦方向の二枚貝によ



第14図　実測土器（2）

る条痕を施し，前者は内面にも顕著な横方向の条痕を施す表裏条痕文土器で，繊維は確認されないようである。色調は黄褐色を呈する。断定はできないが，調整・色調からみて，沈線間に刺突文を施す19・20との類似性を認められなくもないと考えている。繊維を混入する44は，内面ナデ調整でわずかにくびれて外反する器形を成し，色調は灰褐色を呈する。外面には炭化物が付着する。器厚は6㎜を測り，焼成は良いとはいえない。

45～48は，斜方向ないし横方向の条痕文を施す土器片。このうち，45は外反し，表裏の二枚貝条痕は顕著，器厚は5㎜を測り，薄手である。46～48は，器面内外に一部ナデ消しがおこなわれている。45・47・48は，暗褐色を呈し，外反ぎみにたちあがるもの。黄褐色を呈する46は，やや内湾ぎみにたちあがり，器厚は6㎜を測る。48は，二枚貝による条痕文土器で灰褐色を呈し，器厚は4㎜と薄手。ただし，47の外面にみられる条痕調整は，45と同様に顕著であり，羽島下層古段階に比定される16などと，粗い条痕調整がほどこされる点で類似性がみられるものである。

49・50は，底部片でいずれも平底である。前者は器厚1.2㎜を測る厚手のもので，胎土中に繊維を混入する可能性がある。後者には張り出しがみられる。胎土・形態からみて早期後葉に位置づけることができるものと思われる。

2. 土器からみた位置づけ

本遺跡出土の縄文土器について調整・施文方法，胎土への繊維混入から時代性を判断すれば，凡そ無文，厚手で胎土に繊維を混入するものを早期後葉，胎土に繊維を含まず，薄手の無文・条痕文土器のものを前期初頭ないし，中期後葉期に比定できるとおもわれる。また繊維土器として捉えられるものは数例を除き，暗褐色を呈する傾向が認められることから，色調においても一定の時代性を反映している可能性がある。したがって，アガリ遺跡出土の縄文土器を時代ごとに大別すれば，早期後葉の繊維土器を主体として，前期初頭の羽島下層式古段階，中期後葉期の春日式に類似する資料が若干みとめられることから，凡そ3期にわたり，断続的に遺跡が形成されたものと想定される。

また注意しておきたいことは，本遺跡において縄文施文土器が一片も確認できなかったことである。このことから，本遺跡で確認された早期後葉の繊維土器についてはダヤ前遺跡で確認された縄文施文のみられる菱根式に先行するものといえ，これらは，調整・器厚・色調などからみて，類型として新槙原遺跡で確認された繊維土器とほぼ同型のものとして捉えることができよう。また，おなじく繊維土器の出土をみた川ノ免遺跡の資料を実見したところ，川ノ免遺跡の繊維土器は厚手で胎土中に粒子を多く含むことが確認された。一方，アガリ遺跡のものは薄手で胎土がより精選されていることから，同じ脈絡にあるとはいえ，その製作手法的相違には時期差を考慮して良いのではないだろうか。ただし，アガリ遺跡出土の繊維土器には撚糸文を看取できるものが，確認できなかったことを断っておきたい。

そして，資料数が僅少であるものの，中期後葉期の資料について触れれば，これらは，小田原遺跡で確認された里木Ⅲ式とあわせて，石ヶ坪遺跡で多量に出土した並木式・阿高式に先行するものであり，当該期の土器様相を知る上で貴重な資料になるものとおもわれる。

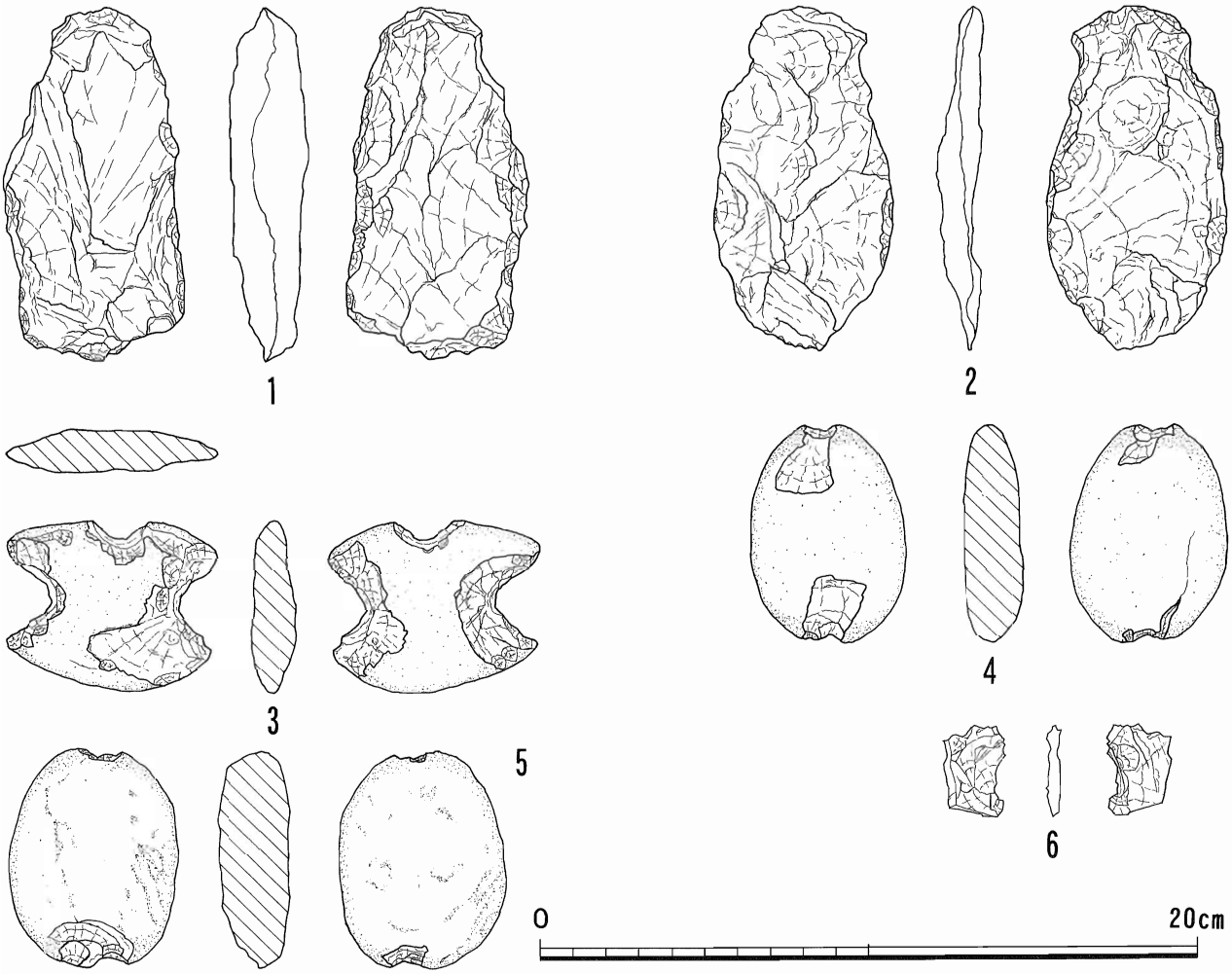
なお，本縄文土器の位置付けについては辰馬考古資料館の矢野学芸員，また別府大学院生の渡辺聡氏らのご教示によって成ったものであるが，中には私見で捉えた箇所もあるのでご寛容いただきたい。

最後に川ノ免遺跡の土器を実見にご厚宜を頂いた瑞穂町の森岡弘典氏にお礼を申し上げ，以上，土器の位置付けとしておきたい。

３．石器類（第15図・第２表・図版８－４）

１はＡ調査区の拡張区に出土した打製石斧で，凝灰岩質のもの。器長約11㎝，器幅5.8㎝，器厚2.3㎝を測り，やや小振りのものである。周縁から粗い２次加工がみられるが，良品といえるものではない。２も同じく拡張区から出土した凝灰岩質の打製石斧である。器長11.5㎝，器幅5.5㎝，器厚1.2㎝を測り，薄手といえるもの。基部分には両縁部からの抉り方の剥離がみられるが，意図的によるものなのか，また偶然性なのか判らないが，器厚が薄いということからみると，もしかしたら，縦形石匙の機能を有したものであったものかも知れないと考える。

３～５は石錘で，いずれもＡ調査区の４層に出土した自然礫を用いたもの。このうち３は，砂岩系の楕円形をした堆積岩で，３方辺からの深い抉りがみられる。その抉りは深いもので1.6㎝を測り，いずれも整った半円状に成形され，その該部には成形上のものなのか，また頻度の使用によって生じたものかは判らないが，擦痕状のものみられ平滑的である。形状から石錘とみているが，その抉りが３方にあること，極めて深く成形されていることから，別機能のものであった可能性があり，した



第15図　実測石器

がって「異形石器」と呼称しておくことにしたい。そして４・５は，両端部に敲打によって打欠かれた石錘で，花崗岩質の自然礫を用いてつくられたもの。前者は短径5.2㎝，長径6.5㎝を測り，重さは99.4ｇ。後者は短径4.5㎝，長径6.5㎝で，重さは77.5ｇを測る。

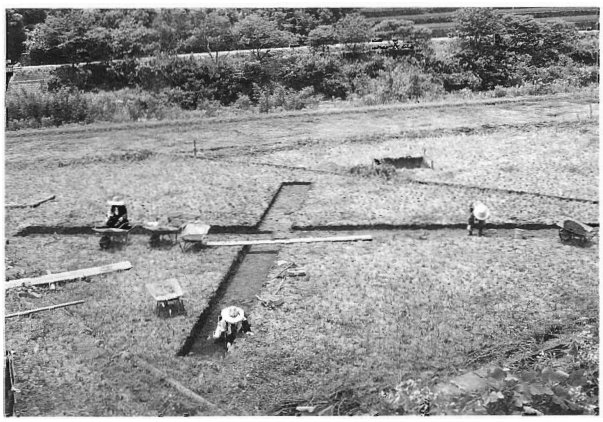
６は本遺跡で一点の剥片が出土しているが，その一点である。材質は安山岩で，一部には凝灰質のものが混在していて，強鋭的なものといえるものではない。２次加工を施した部分もみられず，利器として加工されたものではないであろう。

（渡辺　友千代）

１．調査地点鳥瞰

２．北東側からみた遺跡近景

３．対岸の南側から捉えた遺跡近景



４．北側からみた十字トレンチの発掘風景

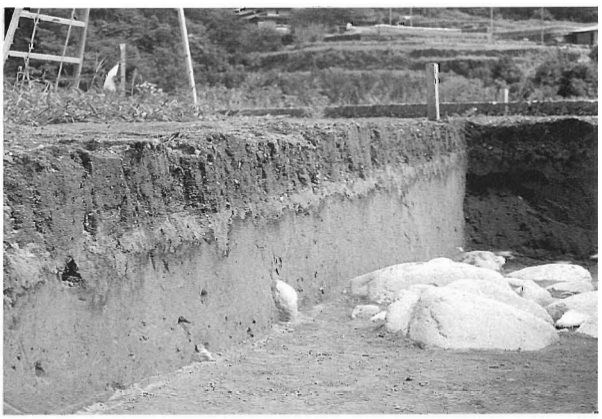
５．西側からみたＡ－ａ調査区の北東壁

図版２

１．Ａ－ａ調査区の西壁（北東から）

２．Ａ－ａｂ拡張区西壁

３．十字トレンチ北辺の東壁（南西から）



４．十字トレンチ南辺の東壁（北西から）

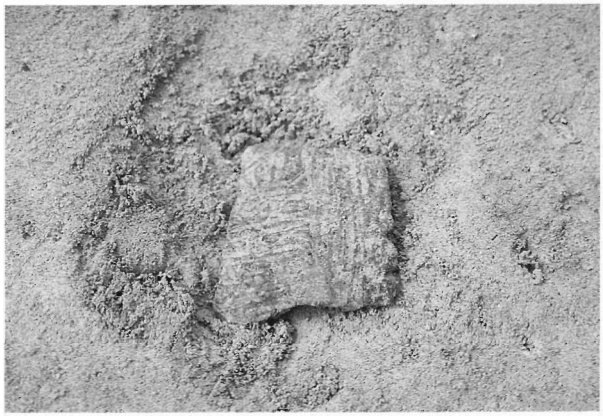
５．Ｂ区北西区の北西壁（東から）

６．A調査区の南端側に表出した3B層黒褐色土

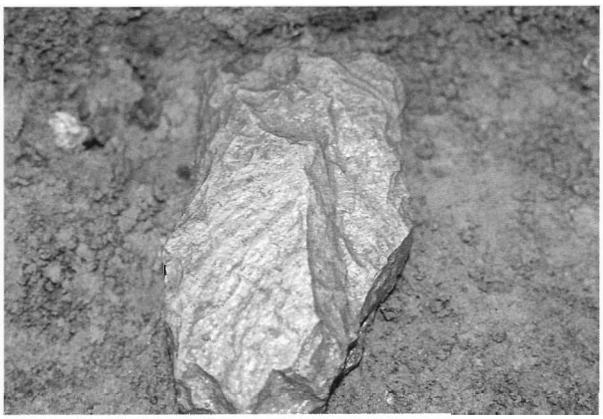
７．4層下位部に陥入した暗褐色砂質土（中位部）

８．Ａ－ａ調査区の遺物出土状況

1．土器の出土状況



2．土器の出土状況

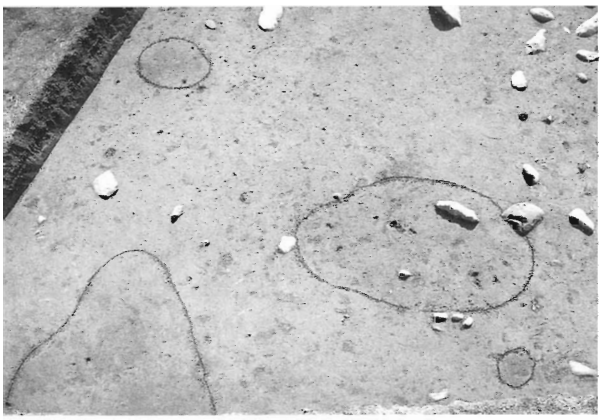


3．打製石斧の出土状況

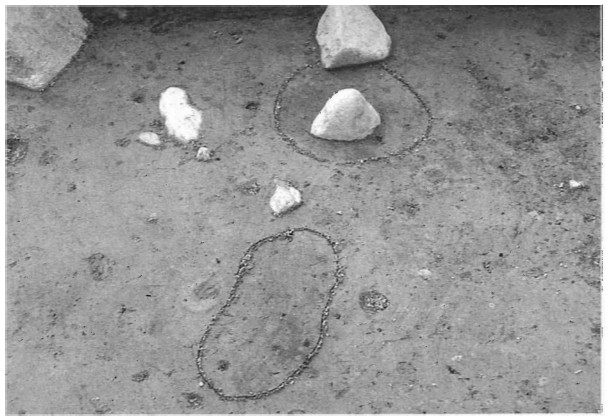
4．異形石器の出土状況

5．石錘の出土状況

6．剥片の出土状況

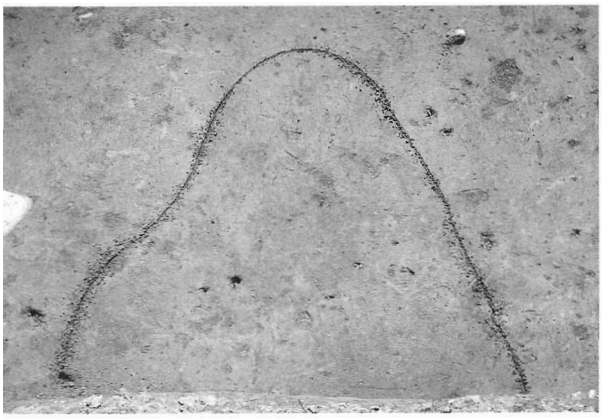


7．A－b調査区の遺構表出状況（西から）

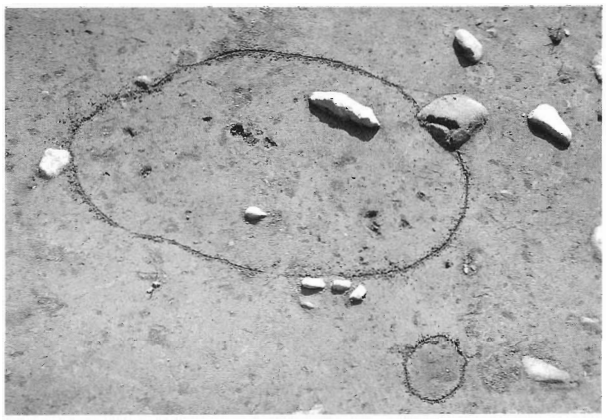


8．SK01・SK02の表出状況（東から）

図版 4

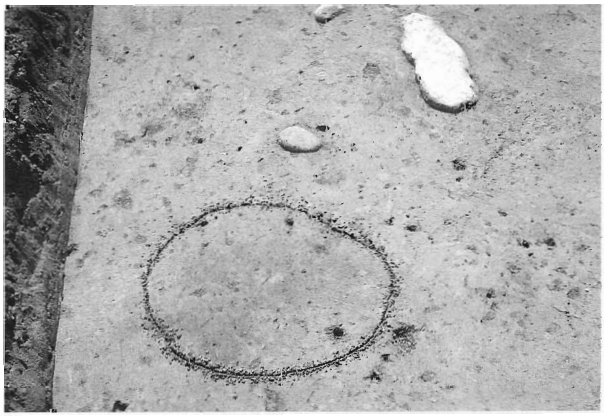


1．SK03の表出状況（西から）



2．P01・SK04の表出状況（西から）

3．P02の表出状況（北から）

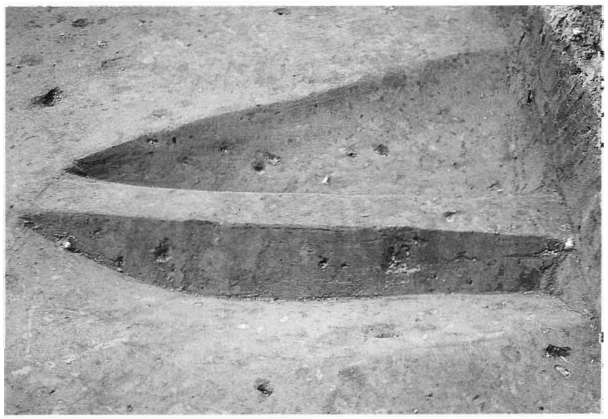


4．SK05の表出状況（西から）

5．P03・SK07の表出状況（南から）

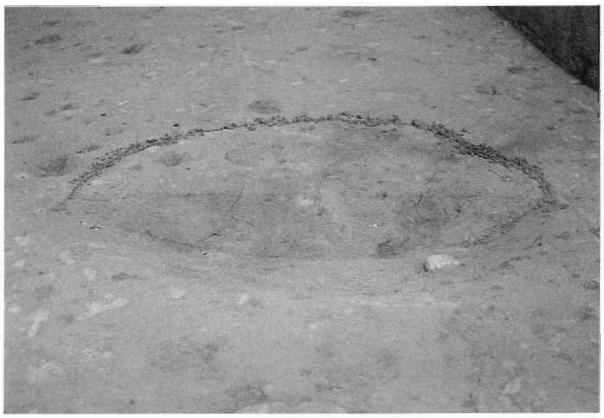
6．SK08の表出状況（東から）

7．SK01・SK02の半截状況（北東から）



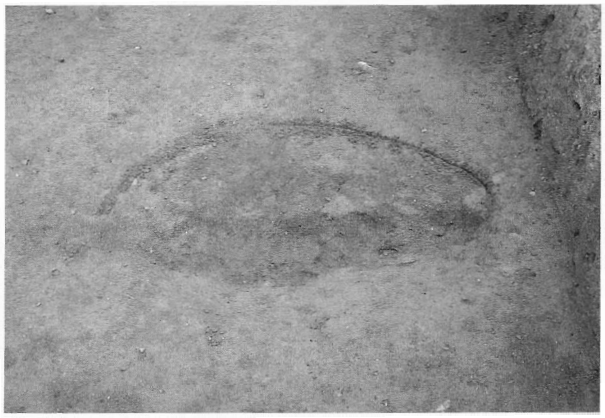
8．SK03の半截状況（北から）

1．SK04の半截状況（東から）

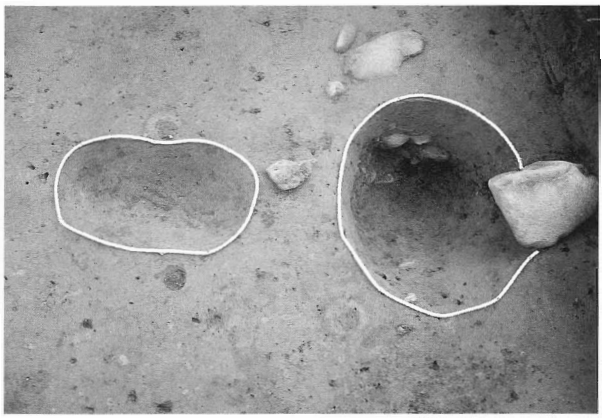


2．SK05の半截状況（東から）

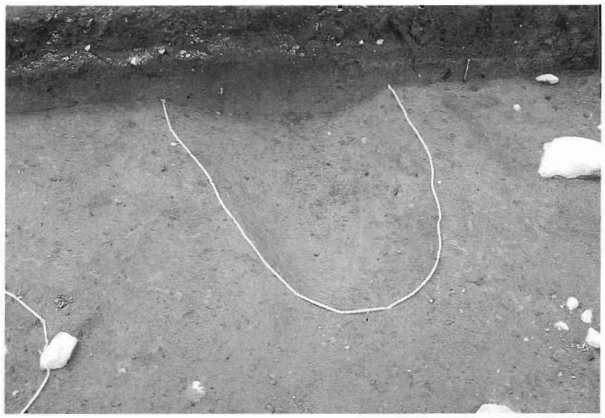
3．SK07の半截状況（南から）



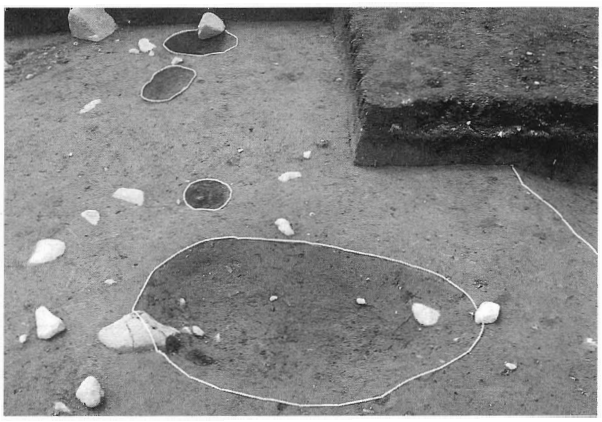
4．SK08の半截状況（南から）



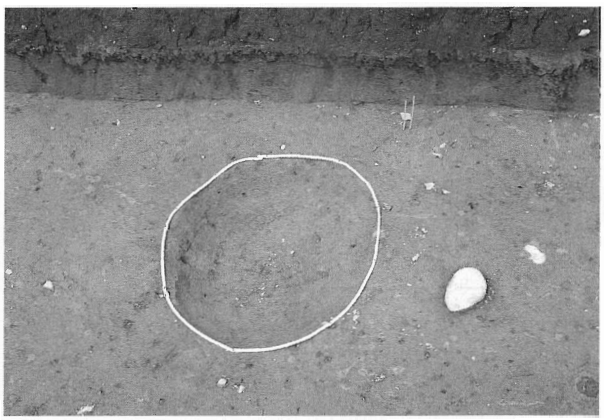
5．SK01・SK02の検出状況（北東から）



6．SK03の検出状況（東から）

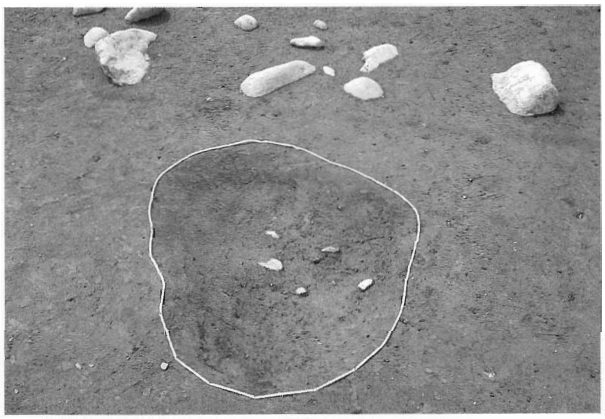


7．P01・SK04の検出状況（南西から）

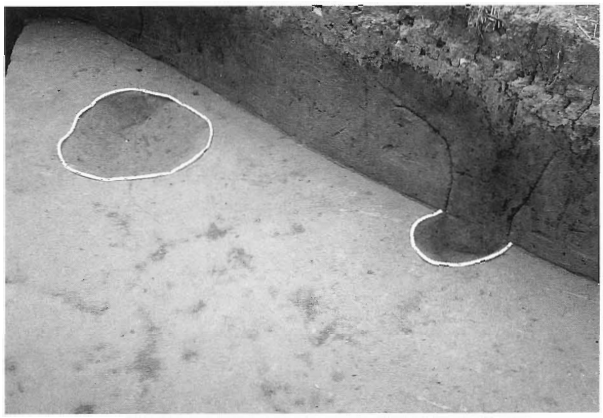


8．SK05の検出状況（南西から）

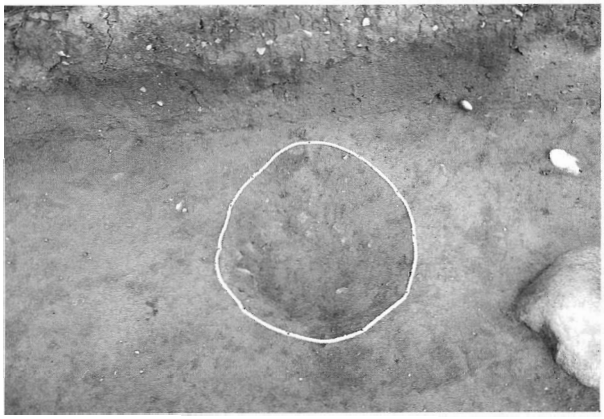
図版 6



1．SK06の検出状況（東から）



2．P03・SK07の検出状況（南東から）



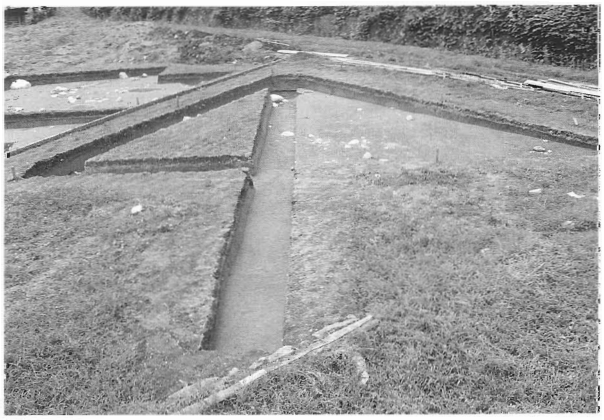
3．SK08の検出状況（南東から）

4．A－b調査区の遺構検出状況（西から）

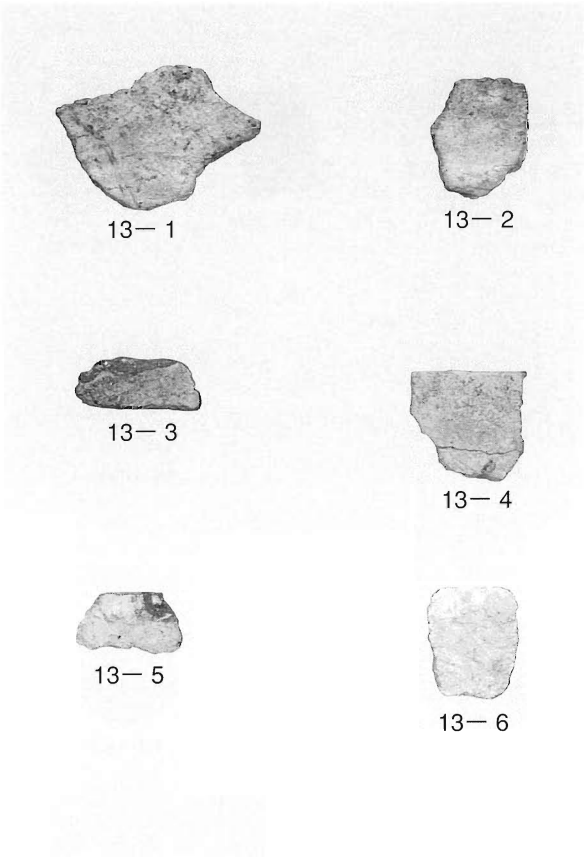
5．A－a調査区の完掘状況（西から）

6．A－b調査区の完掘状況（西から）

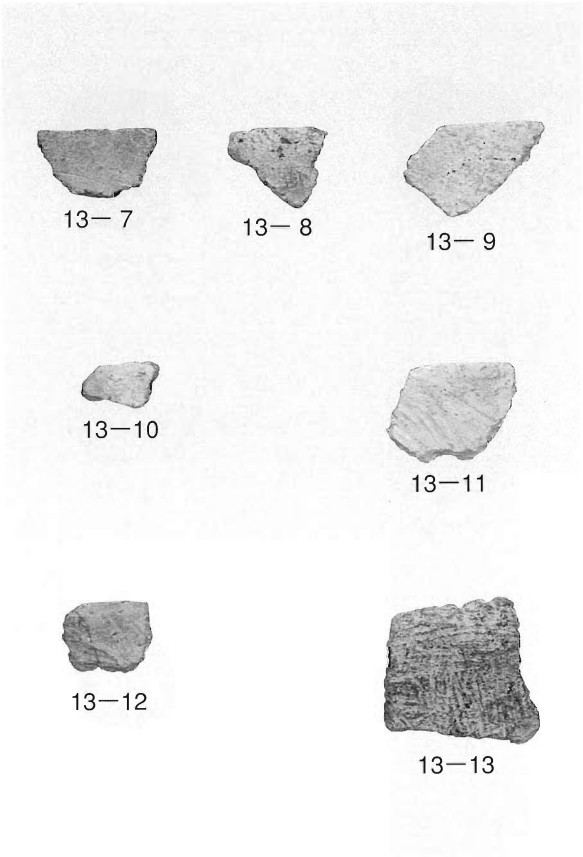
7．B区北西区の完掘状況（東から）



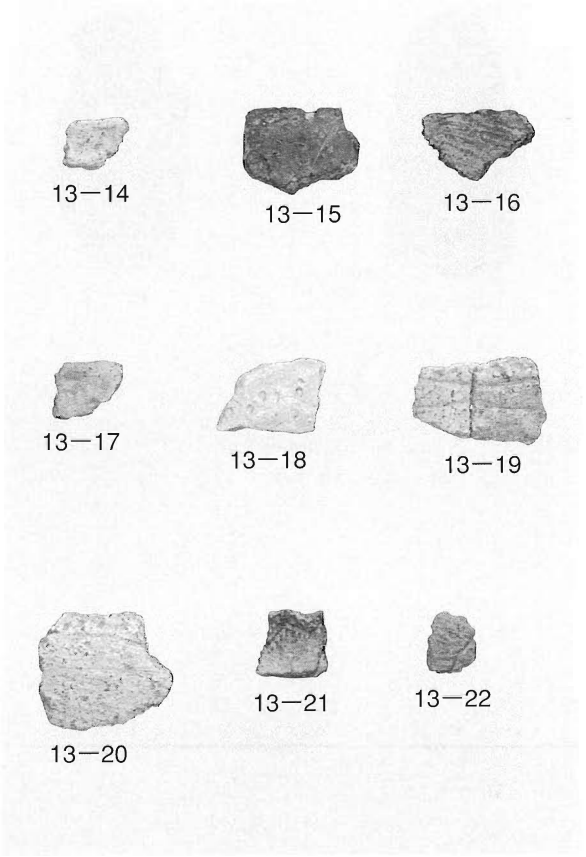
8．B調査区の完掘状況（東から）



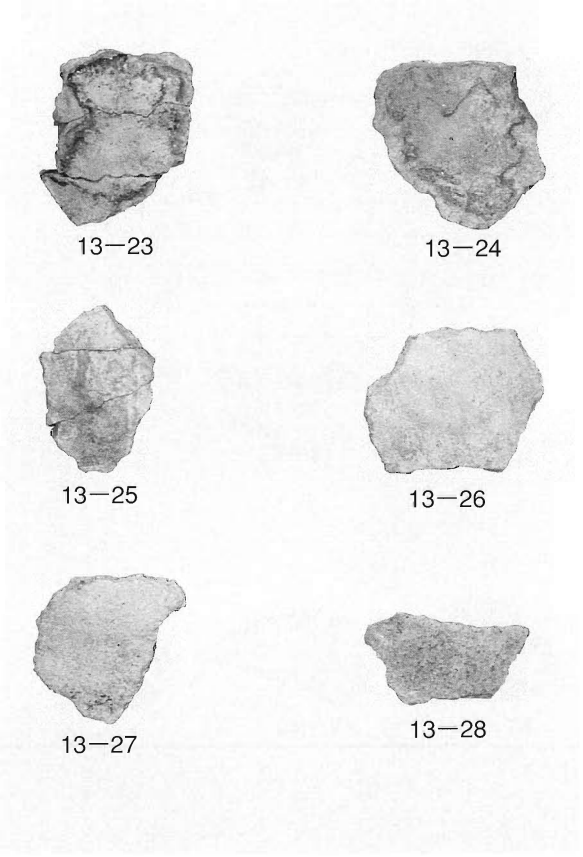
1．実測土器（1）



2．実測土器（2）

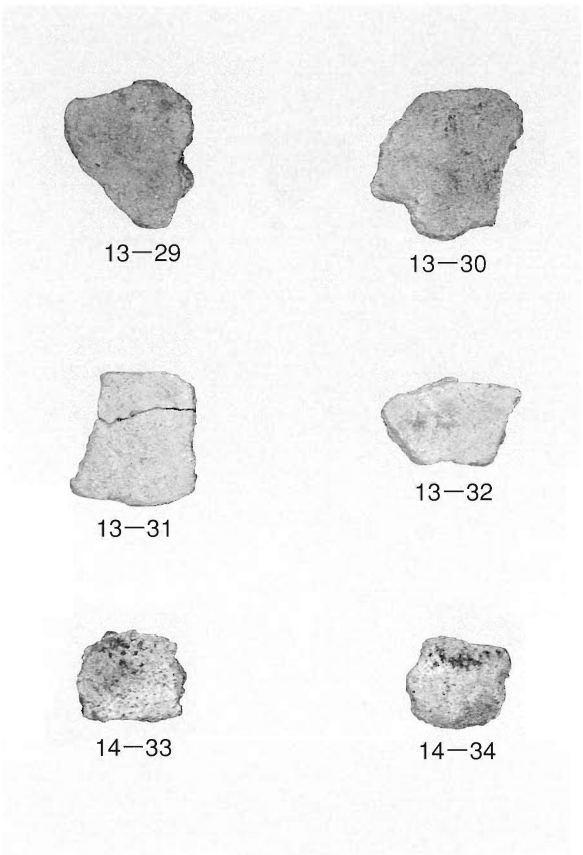


3．実測土器（3）

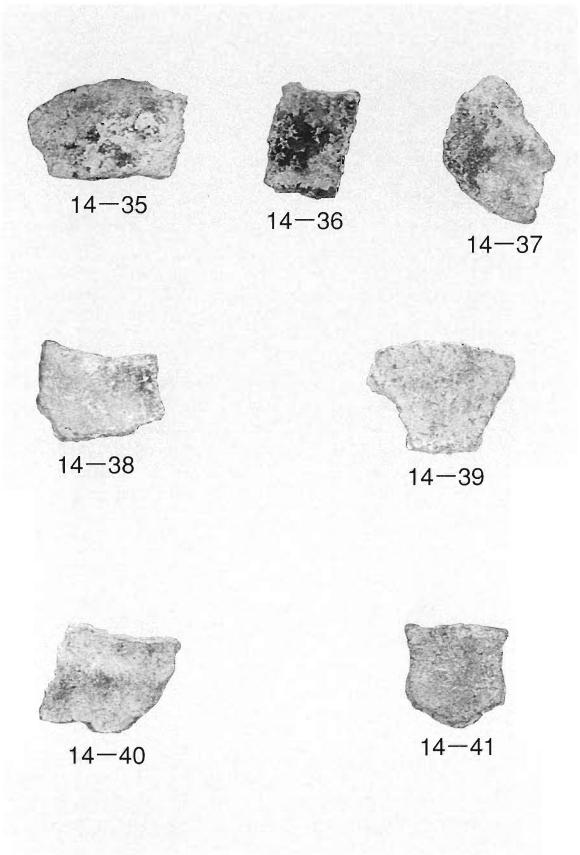


4．実測土器（4）

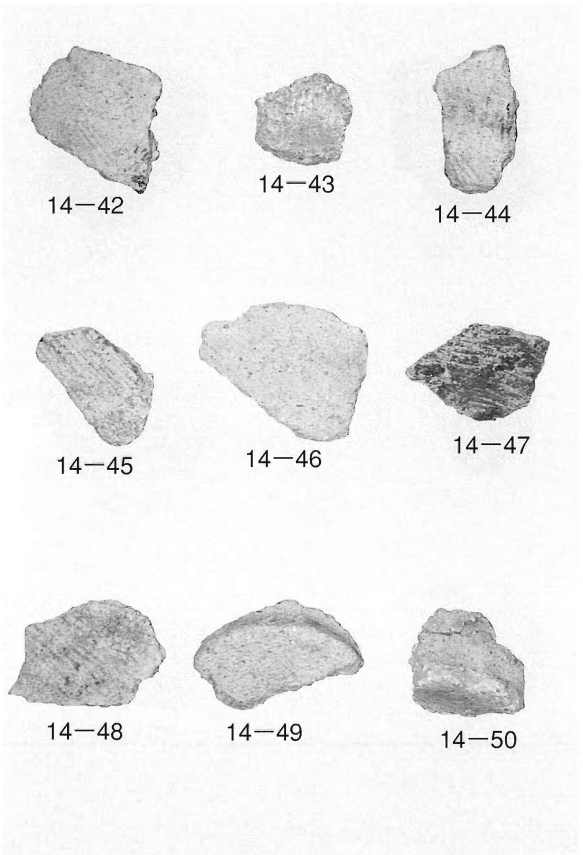
図版 8



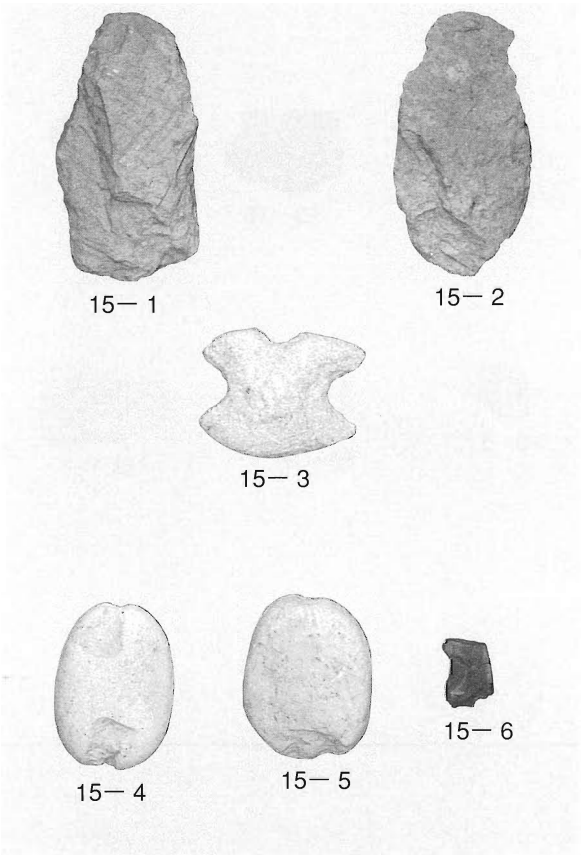
1．実測土器（5）



2．実測土器（6）



3．実測土器（7）



4．実測石器

平成14年３月12日　印刷
平成14年３月18日　発行

匹見町埋蔵文化財調査報告書第39集

アガリ遺跡

発　行　　匹見町教育委員会
島根県美濃郡匹見町大字匹見イ1260

印　刷　　株式会社　谷口印刷
島根県松江市東長江町902－59